

# 古典ヒンドゥー法の家産分割規定

山崎利男

はしがき

一 家産と特有財産

二 家産分割

三 相続人

はしがき

インドにては、西暦八世紀以前に、ダルマ・シャーストラ (Dharmaśāstra) と總稱される日常生活の義務および法規定を記した書が多く著わされた。それらのうちで今日に伝えられたものは次頁のとおりである。<sup>(1)</sup> (\*印は散佚して註釋書・綱要書に採録されて伝えられたもの。) これらの書を古典ヒンドゥー法典とよび、これらに記された法規定を古典ヒンドゥー法とよぶことにする。

古典ヒンドゥー法典の範圍は二方面から限定することができよう。すなわち、(一) それは西暦八・九世紀以後數多く著作された註釋書 (bhāṣya or tika) と綱要書 (dharmaṇibandha) より以前に著作されたものである。註釋書は

古典ヒンドゥー法の家産分割規定

法	典	略稱	テ	ク	ス	ト	翻	譯	著 作 年 代
第 一 期	(P. V. Kane 説)								
(アースタムバ) Āpastamba (アタタ)	Āp	G. Bühler, Bombay 1892 (2nd ed.)					G. Bühler, Oxford 1879		600 BC -300 BC
Gautama (ガタマ)	Ga	A. F. Stenzler, London 1876					〃		600 BC -400 BC
Vasīṣṭha (バシスタ)	Va	A. A. Führer, Bombay 1916 (2nd ed.)					G. Bühler, Oxford 1882		300 BC -100 BC
Baudhāyana	Ba	E. Hultsch, Leipzig 1922 (2nd ed.)					〃		500 BC -200 BC
第 二 期									
(マヌ) Manu (マナ)	M	J. Jolly, London 1887					G. Bühler, Oxford 1886		200 BC-200 AD
Yājñavalkya (ヤヤ)	Y	A. F. Stenzler, Berlin 1847					A. F. Stenzler, Berlin 1847		100 BC-300 AD
Viṣṇu (シヤソカ・リキタ)	Vi	J. Jolly, Calcutta 1881					J. Jolly, Oxford 1900		300 BC -100 BC
* Śaṅkha-Likhita	ŚL	P. V. Kane, 1926							300 BC -130 BC
第 三 期									
(ナラダ) Nārada (ナラ)	N	J. Jolly, Calcutta 1885-86					J. Jolly, Oxford 1889		100 BC -300 AD
* Bṛhaspati (カッタ)	B	K. V. R. Aiyangar, Baroda 1941					〃		200 BC -400 AD
* Kātyāyana (カヤ)	K	P. V. Kane, Bombay 1933					K. V. Kane, Bombay 1933		400 BC -600 AD
* Vyāsa (ハヤ)	Vy	B. Ghosh, 1931-1933							200 BC -500 AD
* Hārta	Hā	J. Jolly, München 1889					J. Jolly, München 1889		400 BC -700 AD

特定の古典ヒンドゥー法典を註釋・解説したものであり、綱要書は諸法典の規定を秩序をととのえて註釋・解説したものであるが、また註釋書にても綱要書と類似した形態をとつて、註釋する法典の規定に相應する規定を諸法典から引用し、これを註釋することが多く、兩者は古典ヒンドゥー法の權威を認めてこれを繼承し發展したものであるといふ基本的性格において同じである。そして古典ヒンドゥー法典がスムリティとよばれて聖仙<sup>リ</sup>によつて述べられたものとされ、そこに權威の依り處を求めて、著者の名が全く影をひそめているのに對して、註釋書と綱要書には歴史的人物としての著者の名が明記されている。次に、(一)古典ヒンドゥー法典と同時代のバラモンの著作にても、「マハーバータ」、「ラーマヤーナ」、「カウティルヤのアルタ・シャーストラ」<sup>(2)</sup>(Arthaśāstra of Kauṭilya)——以下 Kant と略稱する——、および諸ブラーナ<sup>(3)</sup>(Purāṇa)にも法規定が記されているが、これらは古典ヒンドゥー法典と性格を異にするので、これらを含めない。繰返していえば、古典ヒンドゥー法典はグルマ・シャーストラとよばれるもので、西暦八世紀以前に著作され、その著作はスムリティとして聖仙に假託されたものである。そしてバラモン古典のうちで法規定を記した最も根幹的なものであり、法を扱つた註釋書・綱要書に繼承されたものである。この意味にて B, R を始めとして Devala, Pīṭāmaha, Yama, Viddha Manu などの散佚した法典もここに含む。

私が諸學者の研究に基いて新たに考究する所以は、古典ヒンドゥー法がどのような性格をもち、どのような發展を遂げたかを追求し、そして法規定の法的性質を明らかにし、もつてインドの法史研究の基礎を据えることにある。本稿はその第一の試みとして Dāyadhāga (Partition of wealth) の規定を考察したものである。<sup>(4)(5)</sup>

(1) 本註で一〇八頁の表についてまとめて註記する。まず表記のテキストと翻譯とは私が参照できたもののうちで最も信據できるものを掲げた。Vy のテキストは B. Ghosh 及び Ehrenzage für W. Geiger, Leipzig 1931, ss. 108-121 及び Zeitsch-

rit für Indologie und Iranistik, Bd. ix. 1933, ss. 78-92 と發表したのを譯す (匡文 Indian Culture, Vol. ix. 1942, pp. 65-98 と發表したのを參照せよなど) ŚL 誌 P. V. Kane 著 Annals of the Bhanderkar Research Institute, Vol. vii. 1926, pp. 101-128, Vol. viii. 1926, pp. 93-132 と發表したのを譯す (Ś 及び Śaṅkha の編輯や編輯するのを著述する用する) Hā 及び K による翻譯は J. Jolly : Der vyavahāradhāyā aus Hārta's Dharmasāstra nach Chitlen zusammengestellt, Abhandlungen der k. bayer. Akademie der Wiss. I Cl. xviii. Bd. ii. 1889, ss. 507-24 と發表された。翻譯書は G. Bühler 及び J. Jolly による The Sacred Books of East——以下 SBE と略稱する——所収ののである。邦譯書では、中野義照氏の Ga (密教研究、四四、一九三二年) M (一九五一年) 及び Y (一九四五年) 田邊繁子氏の M (一九四八年) がある。また M 及び Jolly 及び G. Jhā : Mann Smṛti Notes, Part I Textual, Calcutta 1924, G. Jhā (ed.) : Mann-smṛti with the 'Manubhāṣya' of Medhātithi, Calcutta 1930-39 (Bibliotheca Indica, No. 256) 及び Y 及び Jolly 及び H. Losch : Die Vājñavalkya-smṛti, Ein Beitrag zur Quellenkunde des indischen Rechts, Leipzig 1927 を參照す。Losch 及び Jolly 及び Stenzler 版は Visvarūpa 註本 (Trivandrum Skt. Series, Nos. 74, 81) 及び Aparārka 註本 (Ānandāśrama Skt. Series, No. 40) 及び Agnipurāṇa 及び Gaudapuruṇa を合併し、彼独自の章節を設け、整理したものである。

第三期諸法典のテキストは遺憾ながら不完全である。このことは別の機會に述べることにし、ここでは次の點を注意しておく。また N 及び K. Sāmbaśiva Śāstri (ed.) : Nārāyaṇamānasaśrītiṭā with Bhāṣya of Bhavasyāmīn, Trivandrum 1929 (Trivandrum Skt. Series, No. 97) ——以下 TSS 版と略稱する——があり、これは Jolly 版と若干の出入があり、また語句が異なるものが極めて多いが、本稿は Jolly 版に據り、TSS 版でない規定の場合に註記するにとどめた。次に N 以外のものはいずれも註釋書と綱要書に引用されたものを集輯したものであり、表記したものを以外にも私が參照できなかった若干の集輯書がある。いま十二世紀までに著作されたといわれる註釋書と綱要書にして古典ヒンドゥー法の規定を引用しているものをあげ

る。次のとおりである。Medhātithi の M の註釋書 (Medh) 'Vīśvarūpa' の Y の註釋書 Bālakṛtja (Vīś) 'Vijñāneśvara' の Y の註釋書 Mīrākṣara (Mīr) 'Lakṣmīdhara' の綱要書 Kṛtyakalpataru Vol. xii. Vyavahārikapāṇḍa (Kṛt. Vy) 'Aparāka' の Y の註釋書 (Apa) は Jīmūtvāhara の綱要書 Dāyabhāga (DB) である。括弧内はそれぞれの略稱として用いる。また R. の Medh, Vīś, Apa のテキストについては前に記した。Mīr と DB とはテキストが参照できなかったため、H.T. Colebrook: Two Treatises on the Hindu Law of Inheritance, 3rd ed. Madras 1857 (1st ed. 1810) を参照し、その章款を附した。Kṛt. Vy は一九五三年に K. V. Rangaswami Aiyangar によって Gaekwad's Oriental Series, No. 119 として始まった。版されたので、同氏の B の集輯書の他には利用されていなか。この書は古典ヒンドゥー法の規定を最も豊富に引用しているものであり、ここに引用された規定には諸集輯書に採録されていないものが少なくない。私は上記の諸書によつて表記以外の法典の規定を取扱ひ、また若干の規定については集輯書のテキストを改めた。なお第三期諸法典の二つ以上（とくに B と K）に同一の規定が見出されることが極めて多く、その整理はむずかしい問題である。本稿にて、例えば K. 905 (= B. xxvi. 30) というように、括弧内に記したものは、註釋書・綱要書によつて法典を誤つて引用されたと推定したものである。

著作年代については P. V. Kane の説は History of Dharmasāstra—HDI と略稱する——Vol. 1 (Poona 1930) に記されているものである。(Vi の表記の年代は古い部分で、新しい部分は西暦三世紀以後とする。) 同氏はその後説を改め、同書第四卷 (1953) pp. ix-x は M を 200 BC-100 AD, V を 100-300 AD, Vī を 100-300 AD, N を 100-400 AD, B を 300-500 AD, に改めつゝいる。Kane の説は代表的なものとつてあげたに過ぎず、諸學者の説は實にさまざまであつて、諸法典の先後關係についても必ずしも一致していないし、著作地域については明らかにされていない。そこで私は、古典ヒンドゥー法の發展を考察するにあつて、文字通りの假説に通ぎないが、各法典の性格と著作年代についての諸學者の見解を考慮して、表記のように三期に分つてみた。なお Hiranyakeśi-Dharma Sūtra は Ap を若干改變したものと、獨自性をもたないため、Vaiśnānasa-Dhs は他の Dhs と異なり、法規定を記してないため、兩者とも表に記さなかつた。

また各法典の序言は、チタメナなどの翻譯に附された Introduction などの Kane の前掲書第一巻の他の次のものを参照せられた。J. Jolly: *Recht und Sitte, Strassburg 1896*, ss. 1-29. — 以下の書を RS の註釋する—— (B. K. Ghosh の英譯書 *Hindu Law and Custom, Calcutta 1928*), M. Winternitz: *Geschichte der indischen Litteratur*, Bd. iii, Leipzig 1922, ss. 479-501, J. J. Meyer: *Über des Wesen der altindischen Rechtschriften und ihr Verhältnis zu einander und zu Kautilya*, Leipzig 1927, L. Renou et J. Filiozat (ed.): *L'Inde classique*, tome I, Paris 1947, pp. 429-444. 邦文の序言は金倉國照「印度中世精神史」上「一九四九年」第三章。

- (2) 本稿以下の Kaut. の規定を註記するところを考へた。そのテキストは R. Sharma Sastri 版 (*Mysore 1901*, 2nd ed. 1919, 3rd ed. 1924, Mysore Skt. Series, No. 54), J. Jolly & R. Schmidt 版 (*Lahore 1923*, Punjab Skt. Series, No. 4) などの T. Ganapati Sastri 版 (*Trivandrum 1924*, Trivandrum Skt. Series, Nos. 79, 80, 82) などから、以下の三版を参照した。R. Sharma Sastri 版第二版の記した。翻譯書は R. Sharma Sastri (*Mysore 1915*, 4th ed. 1951), J. J. Meyer (*Leipzig 1926*) などの中野義照氏 (一九四四年) のものである。その著作年代については、マウルヤ王朝の宰相カウティリヤの著作とする説とこれを否認して西暦一—三世紀に求める説とがあり、後説が穩當であると、いまだ詳細に立證されなかつた。古典コンメンタール法と翻譯とについては J. J. Jolly: *Arthasāstra und Dharmasāstra*, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. lvii 1913. ss. 49-96, *ibid.* Bd. lviii 1914. ss. 354f., M. Winternitz: *Dharmasāstra and Arthasāstra* (Sir Asutosh Memorial Volume, Patna 1926, Part 1. pp. 25-48), J. J. Meyer: *op. cit.* などの參考となる。

- (3) cf. H. Losch: *op. cit.* Einleitung, J. J. Meyer: *Gesetzbuch und Purāṇa*, *Ein Beitrag zur Frage von des Entstehungsart der altindischen Rechtschriften und der Purāṇa*, Breslau 1929, 中野義照譯著「ヤーギニヤムニキヤ法典」四〇三頁以下。なお註釋書と綱要書とは諸プラーナ「マハーバーラタ」および「ラーマヤナ」の規定が引用されているが、その數は僅かである。

(4) 私が参照した古典ヒンドゥー法の *Dayabhāga* 規定について重要な論考は次の二書である。Jolly: R.S. ss. 76-90, Kane: HDh. iii. pp. 543-824, J. Jolly: *Outlines of an History of Hindu Law of Partition, Inheritance and Adoption*, Calcutta 1885. (Tagore Law Lecture 1883), K. P. Jayaswal: *Mann and Vijnavealkya, a comparison and a contrast, A Treatise on the Basic Hindu Law*, Calcutta 1930. (Tagore Law Lecture 1928), pp. 253-284, N. C. San Gupta: *Evolution of Ancient Indian Law*, London & Calcutta 1953. (Tagore Law Lecture 1950), pp. 170-226. 邦文では田邊繁十「マ法典にあらわれた相續」法制史研究、六、一九五六年。

(5) 念のためにいえば、古典ヒンドゥー法の規定と現實との間に距離が存する。Kautil. iii. 7. p. 165 には「地方・ジャーティ・サンガあるいは村落に慣習的な法が存する。それによつて相續の法 (*dāyadharmā*) を定むべきである」(*desasya jātya sanghasya dharmo grāmasya vāpi jāti ucitas tasya tenaiva dāyadharmain prakalpayet*) である。K. 884 A もこれを繼承しており、*Dayabhāga* については地方などの法慣習が現實を規律していることを自ら認めている。この法規定と現實との關係は古典ヒンドゥー法の性格の詳細な研究を通じて始めて理解すべきものであり、本稿はこの問題を直接取扱っていないが、後日の論考の前提となるものである。

また註釋書・綱要書の時代には、古典ヒンドゥー法典の註釋・解説という形式をとつて著者の法解釋が記され、ここに法の發展を見ることができるのであるが、そこに最も著しく發展したのは *Dayabhāga* についてであり、その地域的な學派の間の法解釋の相違はとくに *Dayabhāga* について見られるといわれている。このような *Dayabhāga* の發展の問題はヒンドゥー法史研究の重要な課題であることはいうまでもなく、註釋書・綱要書の *Dayabhāga* についての考究は古典ヒンドゥー法のそれを検討することなくしては不可能である。この意味にて本稿は註釋書・綱要書研究の準備的試みであり、註に原文をそえたのは後日の研究にそなえるためである。

## 一 家産と特有財産

N. xiii. 1 には「男子によつて父の財産の分割を定めること (vibhago<sup>1</sup> rthasya pitrusya putrain yatra prakalp-yate)」、これが賢者によつて法の項目 (vivādapada) として Dayabhāga とよばれる」とある。すなわち dayabhāga は男子が「父の財産」<sup>(1)</sup>を分割することであり、このことが古典ヒンドゥー法の相續の基本原理である。そして Dayabhāga の項目にては父を長とする家族を主要な対象とする。それではこの家族の財産享有形態をどのように規定しているのだろうか。まず家産と特有財産の問題にて検討する。

有名な M. viii. 416 には、「妻・男子・奴隷はその財産をもたない<sup>(2)</sup>と宣べられる。彼らが取得するものは彼らが属する者の財産である」とあり、妻子は奴隷とともに財産享有能力をもたず、彼らが取得する財産はすべて家長たる父に属することを述べている。しかし N. xiii. 6 などには、特有財産として、strīdhana (婦女の財産)、<sup>(3)</sup>學識および勇氣によつて取得する財産をあげている。これらの特有財産はその享有者が任意に處分することができ、従つて家産から區別され、家産分割にあたつて除外されるものである。strīdhana は他の特有財産と區別すべき性質をもつので、これについては次稿にて述べることにし、ここではその他の特有財産について述べる。

第一期では、Ga. xxviii. 30 に「學識ある者は欲するならば、獨力にて得たものを學識なき者に與えなくともよく<sup>(4)</sup>」とあり、この規定のみが學識によつて取得する財産を特有財産と認めているごとくであるが、その表現が明確ではな<sup>(5)</sup>。Va. xvii. 51 には「彼ら〔男子〕のうちでだれかが獨力にて得たものがあるときには、二つの分 (amśa) を得べきである<sup>(5)</sup>」とあり、男子が獨力にて取得した財産は特有財産として認められることなく家産に繰入れられ、その男子には



家産分割に際して他の男子の二倍の相續分が認められているに過ぎず、男子の財産享有能力が否認されている。第一期には特有財産について上記の二規定が見出されるに過ぎず、特有財産が充分に認められていないといえよう。そして家産と父の特有財産とを區別する規定がない。従つて父が *strīdhana* を除いて家族の全財産を享有するに近い。

しかるに第二・三期には特有財産は認められて、ことにⅡにはこれについて説明した規定が多い (866-78)。だがこれらの規定にみえる特有財産は、學識および勇氣によつて取得したもの、傳來の財産の失われていたのを回復したもの、および父母などがその特有財産から贈與したものに限られている。それらのうちで學識によつて取得した財産<sup>(6)</sup> (*vidyādhana*) は最も多く規定されているので、最も重要視されている特有財産といえよう。Ⅱの説明によれば、

その財産は、弟子を教授して得たもの・犠牲式を司祭して得たもの・問題を解答して得たもの・疑わしきことを解決して得たもの・自己の知識を知らせて得たもの・論争から得たものである。<sup>(8)</sup> 従つてこれは明らかに主としてバラモンが享有するものである。ただ K. 870-871 は、技藝人 (*śilpin*) が原價 (*mūlya*) より多いものを得るとき、および賭事などにて學識によつて他人を敗つて得るときにも、その取得産を學識による特有財産と認めており、この規定がこの範圍を擴大して解釋しているに過ぎない。次に勇氣によつて取得した財産 (*śauryadhana*) とは、同じく K. 876 によれば、危険に身を挺して勇敢な行爲をなすときに、主人 (*svāmin*) がこれを喜びて與えたものであり、戰場にて奪取したもの (*dhvajajhṛta*) も (K. 878) これに含むことができよう。

しかしこゝで注意すべきことは、家族員が獨力にて取得した財産は必ずしもすべて特有財産と認められていないことである。すなわち、M. ix. 208 に「父の財産に依存することなく、勞働によつて得たもので、自己の努力によつて得たものを、意志に反して〔他の兄弟に〕與えるに及ばな<sup>(9)</sup>」とあり、Vy. ii. 140. にも「父の財産に依存するこ

となく、自己の才能によつて財産を得るときには、それを相続人 (*dayāda*) に與えなくてもよい。これは學識によつて得たものにも適用する<sup>(10)</sup>とあるように、「父の財産」すなわち家産に依存することなく取得するときには特有財産として認められるが、逆にいえば、家産に依存して取得するときには家産に繰入れられるのである。<sup>(11)</sup> Vy. ii. 143-4 に「共同財産 (*sadharaṇa*)」に「屬する」ある乗物・武器に依存して、勇氣などによつて財産を得るときには、兄弟はその分をもつ。彼に二つの分を與え、その残りの者は均しい分をもつ<sup>(12)</sup>とあるのは、このことを示している。このように家産には家族員が取得する財産が含まれているのである。

以上が家族員とくに男子の特有財産の規定である。そして M. ix. 207, Y. ii. 116ab には、自己の職業によつて自活する能力があつて相続を望まない者に、相続を放棄することを許しており、<sup>(13)</sup> 家産の相続を欲しないほどの財産を享有する男子についての規定がある。しかし以上の規定を顧みて、バラモン以外の種姓の家族員の特有財産が多大なものであると考へられな<sup>(14)</sup>う。

特有財産は家族員ばかりでなく家長たる父にも存する。すなわち、M. ix. 209 = Vi. xviii. 43 に「父が(彼の)父の失つた財産を得るときには、彼は意志に反して男子と分つに及ばない。(それは)獨力にて得たものであるから<sup>(15)</sup>」とあり、K. 866 も同趣旨である。<sup>(16)</sup> B. xxvi. 58-59 は次のように規定している。「父が、祖父の失つたものを自己の才能によつて取得したもの、および學識・勇氣などによつて得たものは、父が權利 (*svāmya*) をもつと宣べられる。その財産から贈與・分割を随意に行うことができる。彼の死後には男子が均等の分をもつといわれる<sup>(17)</sup>」と。この父の特有財産の規定は前述の家族員の特有財産の規定と同様であり、父が任意に處分できる特有財産は限られている。従つて父が祖父から繼承した財産および家族員とともに取得した財産、すなわち家産は父の特有財産と區別せねばな

らず、ここに父が家産を任意に處分するのを制限する意識が存するといえよう。

それでは古典ヒンドゥー法にては家産についての男子の權利をどのように規定しているものであろうか。男子が家産を分割することが相續の基本原理であり、例えば、M. ix. 183ab に「父の財産を取る者は男子であつて、〔父の〕兄弟でもなく父でもなく」<sup>(18)</sup>とあり、B. xxvi. 19ab に「男子は父の財産をとる者であり、實にすべて〔の男子〕は均等の分をもつ」<sup>(19)</sup>とあるように、古典ヒンドゥー法を通じて男子は家産の相續人である。そして、以後には「祖父の財産」について父と男子とが均等の權利 (svāmya, svāmitva) をもつことを規定している。すなわち Y. ii. 121 には「祖父が得た土地・ニバンダ・動産があるときには、父と男子とに同等の權利が屬すべきである」<sup>(20)</sup>とあり、また B. xxvi. 14 も同趣旨であり、祖父の取得産について父と男子とが均等の權利をもつ。そして Vi. xiii. 1-2 には「もし父が男子に分つならば、彼は獨力で得た財産を任意に〔分けてもよい〕。だが祖父の財産にては父と男子とが同等の權利をもつ」<sup>(22)</sup>とあり、N. 839 にも類似の規定があり、<sup>(23)</sup>ここでは父の特有財産と「祖父の財産」とを區別し、兩者に對する父と男子との權利に相違があることを示している。そして N. 840 には「祖父の財産・父の財産・他の獨力にて得たものは、相續人に分割するときに、すべてを分割すべきである」<sup>(24)</sup>とあつて、「祖父の財産」(pitṛika) は「父の財産」(pitrā) や他の特有財産と區別され、父が祖父から繼承した財産であると考えられる。さらに Vy. ii. 132 に「傳來の家屋と土地は父と男子とが均しい分 (anṣa) をもつ。父が欲しなけば、男子は父の財産 (patirka) を分割できない」<sup>(25)</sup>とあり、ここでは明瞭に父祖傳來産について男子が父と同等の權利をもつことが記されている。祖父の取得産・「祖父の財産」・父祖傳來産はいずれも家産を意味すると解釋されるが、それについて男子が權利をもつことの具體的・積極的な效力 (例えば家産の處分には男子の同意を必要とするといふとき) については記されていない。<sup>(26)</sup>そし

て次節に述べるように、M, N などには、父の生前にては男子が非獨立者 (asvatantriya) であつて、家産について能力がなく (anisa)、父の認可を得て始めて分割できることを規定してゐる。<sup>(27)</sup>

以上のように、第二・三期には父および家族員の特有財産が認められて、家産と特有財産との區別が明確になり、家産については男子が父と同等の權利 (svamya) をもつとされて、父が家産を任意に處分するのを制限する意識が存したといえよう。

さらに上記の問題を債務規定を通じて検討する。古典ヒンドゥー法は債務の不返却 (inādāna) の章にて家族の成員の債務について規定している。第一期にては、Ga. xii. 40-41 に「財産を分與された者は債務を支拂うべきである。保證・商業・租税・飲酒・賭博・罰金〔から生じた父の債務〕は男子に達すべきでない」とあり、父の債務のうち父が家と關係なく單獨に負つたものには男子が辨濟責任を負わないという原則的規定が述べられているが、これ以外の規定を見出すことができない。しかるに第二・三期には、父の債務の相續について詳しく規定されると同時に、家族員の特有財産について多く規定されたことに對應して、家族員の債務を認め、その債務に對する父および他の家族員の辨濟責任について規定されている。(父の債務の相續については第三節にて述べる。)

家族員の債務は債務者自身が辨濟すべきことはいふまでもないが、父および他の家族員がどの範圍にてその辨濟責任を負擔するのであろうか。まず N には、男子が父の債務を支拂うべきであるのに對して、父は男子の債務の辨濟責任を負わないといふ<sup>(29)</sup>、ただし「父の命令によつて、あるいは家の維持のために、また貧困のときに、男子が作つた債務を父が支拂うべきである」と<sup>(30)</sup>、辨濟すべき債務を規定しており、B. x. 124, K. 544, も同趣旨である。<sup>(31)</sup> 同様に i. 18, K. 578 には、家の維持のために、貧困なときに、あるいは夫の同意をえて作つた妻の債務も、夫が辨濟責任を

負擔するが、それ以外には負擔しないと規定してゐる。<sup>(32)</sup> 他方 Y. ii. 6 には「妻は、承認した債務、夫とともに作つた債務あるいは自分で作つた債務を支拂うべきであり、その他は支拂うに及ばない」<sup>(33)</sup>とあり、同趣旨の規定は N. i. 16、K. 546 に記されてゐる。<sup>(34)</sup> このように K 以後に妻が夫の債務の辨濟責任を負擔するという規定は、同じく K 以後に妻に財産の相續分を認める規定に對應するものであらう。N. i. 17 には「男子なき寡婦、死する夫に命じられた者あるいは財産を取つた者が〔夫の債務を〕支拂うべきである。財産と債務とは表裏する」<sup>(35)</sup>とあり、この規定は上記のことと關聯するものである。以上のことは、Y. ii. 46, Vi. vi. 31-33, 38-9 に述べられてゐるように、家(kutumba)のためでなければ、父は男子の、夫は妻の、妻は夫と男子の作つた債務を支拂わないと約言できる。つまり家族員が獨自に作つた債務はその債務者のみが辨濟し、家長たる父は辨濟責任を負擔しないが、家のために作つた債務には父が辨濟責任を負擔するばかりでなく、男子や妻にもその責任が及ぶのである。

このことは父の死後にも家産を分割することなく生活する(不分割家族の場合も同様である。すなわち、Y. ii. 49 には「家のために不分割者が作つた債務があり、家長が死しあるいは旅行してゐるときには、その相續人がそれを支拂うべきである」<sup>(37)</sup>とあり、N. i. 3, K. 468 も同趣旨であり、<sup>(38)</sup>家のために作つた債務には、家長(gerhin, kutumbin)が辨濟責任を負擔し、その家産相續人は分割後にも責任を負擔する。<sup>(39)</sup>そして B. ii. 121 には「叔父・兄弟・男子・妻・奴隸・弟子・從屬者(anjivin)が家のために借りるときには、家長が支拂うべきである」<sup>(40)</sup>とあり、N. i. 12, K. 545 も同趣旨であつて、<sup>(41)</sup>叔父・兄弟だけでなく奴隸・從屬者までも家のために債務を作ることができないために、病氣のために作る債務については K. 542-3 に次のように規定されてゐる。「家を維持することができないために、病氣のために、また apatkrita (窮乏のときに作つたもの)といわれる不幸のために作つたもの、そして女子の婚禮と死者の

葬儀のために作つたもの、これらのすべては家長 (prabhu) が作つたもので、家 (kutumba) によつて支拂うべきものである」<sup>(43)</sup>と。ここに家のためにいうことを明瞭に説明し、それが家長によつて作られたものと見做されて、家産から辨濟すべきことを規定している。

以上のように、第二・三期には家産と家族の成員の特有財産との區別が明確になり、これに對應して、家族員の債務に關する規定が記され、家のために負つたものと家に關係なく獨自に負つたものとが明確に區別されて、前者については家長および他の家族員が辨濟責任を負擔し、これを家産から辨濟するのに對して、後者については家父長および他の家族員が辨濟責任を負擔せず、これを債務者の特有財産から辨濟することが定められた。

(1) 古典ベンダー法には、「父の財産」は *pitrasya dravya*, *pitrudhana*, *pitrdravya*, *patika*, *patika dravya* などとさまざまに表わされている。第一期には家産と父の特有財産とが明確に區別されず、*stridhana* を除いて特有財産が充分に認められていないので、「父の財産」は家産を意味し、その限りにても父が家産を専有するという意識を表現している。だが第二・三期では家族員の特有財産に並んで父の特有財産が認められたが、家産を「父の財産」と表わすことは第一期から繼承し、父の特有財産もまた「父の財産」と表わされるので、一々検討することが必要である。なお積極財産は *artha*, *dāya*, *dravya*, *dhanam*, *riktha* をもつて表わされ、これらの語は一般的には區別されていないものである。これに對して消極財産は *rūpa* をもつて表わされる。本稿では積極財産を財産、消極財産を債務と記した。

(2) *M. vii. 416. bharyā putrāś ca dāśās ca tasya (or traya) evādhanāḥ smitāḥ | yat te samadigacchanti yasya te tasya tadadhanam || N. v. 41* はこの規定を繼承している。すなわち *ab* は *adhanās traya evoktvā bhāryā dāśās tathā sutāḥ ||* と *cd* は *M* と同じ。

(3) *N. xiii. 6, K. 877, Vy. ii. 141. N* の規定の *cd* は「これらの三つは分割せられぬ。父が與えたものと同じ」(*triṇy*

etāny avibhāyāni prasādo yāś ca paitikaḥ ॥) とある。K, Vy の規定の cd には、家産分割にあたつて三種の特有財産が相續人 (rikṭin) によつて分割されなうことを記す。なお Vy には stridhana の代りに sandāvika とあるが、次稿に述べるように両者は同義語である。

(4) Ga. xxviii. 30. svayamarjitam avaidyebhyo vaidyaḥ kāmāni na dadyāt. 31 には、「學識なき者は均等に分つべきであらう」(avaidyaḥ samāni vibhajeran.) とあり、これは次の Va の規定と同じ意識に立つものである。

(5) Va. xvii. 51. yena caisān svayamutpāditan syāt davyaiśam eva haret.

(6) Y. ii. 119 2 「傳來の財産に」つ取られつたものを取りかえすとき、それを相續人 (dāyāda) に與えなくともよい。また學識によつて得たものも同じ」(kramādabhyāgatāni dravyāni hitam abhyuddharat tu yaḥ | dāyādebhyo na tad dadyād vidyayā labdham eva ca ॥) とある。S. 273 (Apa. p. 724 には Śiṅga に歸す) には、「傳來の土地に」つ前に失つたものを、一人が取得するときは、「彼に」四分の一分を與えて後、他の者が分に應じつ得る」(pūrvanaṣṭān tu yo bhūmim ekas ced uddharat kramāt | yathābhāgaṇi labhante anye dattivaiśān tu turyakam ॥) とあり、取得した財産が土地である場合には、それは取得者の特有財産と認められなうで家産に繰り入れられ、分割の際に取得者がその四分の一を取ることを規定してゐる。

(7) Y. ii. 123 ab 2 「両親が與えたものはそれが屬する者の財産である」(pitrbhyān yasya yad dattān tat tasyaiva dhanam bhavet ॥) とあり、M. ix. 206 2 「學識による財産、友人から贈られたもの、婚姻の際におよぶ Madhuparka の儀によつて贈られたものはそれが屬する者の財産である」(vidyādhanam tu yad yasya tat tasyaiva dhanam bhavet | maitryan auctvānikān caiva madhuparkam eva ca ॥) とあり、B. xxvi. 46 2 「祖父・父または母が與えたものがあるとき、それを奪つべきにならう。勇氣による財産・妻の財産も同じ」(pitāmahapitrbhyān ca dattān mātṛā ca yad bhavet | tasya tan nāpahartavyān śauryaḥyādhanam tatūā ॥) とあり、Vy. ii. 145 2 B と同様な規定である。





gīnah || tasya bhāgadavyam deyaṁ śeṣaṁ tu samabhīṣaṁ ||

- (13) M. ix. 207 に「兄弟のうちで自己の職業によつて〔自活する〕能力があり、財産を欲しないときは、自己の分からなんらかの生計費を受けつ分れる」(bhṛāṇāṁ yas tu neḥeta dhanāṁ śaktaḥ svakarmajā | sa nibhājyaḥ svakāraṁśāt kīncid datvapajīvanam ||) とある。Y. ii. 116ab に「能力があつて〔財産を〕欲しない者にはなんらかのものを與えて別とする」(śaktasyānīhanānesya kīncid dattvā pṛthakkrīya ||) とある。

- (14) なお同時代の銅板文書などには、王がベラモンに土地および村落を施與したことを記しており、これらの土地および村落の享有が學識による特有財産に含まれると解釋できるとする。(R. West & G. Bühler: A Digest of the Hindu Law of Inheritance, Partition and Adoption, 3rd ed. Bombay 1884, p. 721) ベラモンの特有財産が多大なものとなることは容易である。銅板文書ではベラモンの男子に土地および村落が施與されたことを記するものが若干存する。

- (15) M. ix. 209 = Vi. xviii. 43. paitṛkaṁ tu pitā dravyam anavāptaṁ yad āpnuyāt | na tat putrair bhajeṣ sārḍham akāmaḥ svayamarjitaṁ ||

- (16) K. 866 に「奪われたものおよび失われたものを自己の才能によつて獨力にて得たときは、父は分割に際してこれらのすべしを男子と與えなべし」とある。(svaśaktiṣāhitaṁ naṣṭaṁ svayamāptaṁ ca yad bhaveṣ etat sarvaṁ pitā putrair vibhāge naiva dāpyate ||) とある。

- (17) B. xxvi. 58-59. paitāmahāṁ hitaṁ pitṛa svaśaktiṣā yad upājītam | vidyāśauriādīnāvāptaṁ tatra svānyam pitṛaḥ smṛtaṁ || pradānaṁ svechayā kuryād bhāgaṁ caiva tato dhanāt | tadabhave' pi tanayaḥ samānśaḥ perikṛti-tāḥ ||

- (18) M. ix. 185ab. na bhṛātaro na pitarāḥ putrā rikṭaharāḥ pitṛaḥ ||

- (19) B. xxvi. 19ab. pṛṛikṭaharāḥ putrāḥ sarva eva samānśiṇaḥ ||



れており、後の *Mit. i. l. 21* に見えて *DB. ii. 22* では *Y* に歸している。後のと同様な規定は *Mit. i. l. 21* といつて續いて見える。

(27) cf. Kane: *HDh. iii. pp. 553-7*. たが、古典ヒンディー法の時代について、後述の *Y. ii. 11*、*Y. B* は父が任意に男子の相續分を定めることを認めており、また男子の家産についての具體的積極的な規定が見られないので、*Y. ii. 121* 以下の規定と *M. ix. 114* などの規定とが極めて鋭く對立していたと考えられなく。

(28) *Ga. xii. 40-41. rikhabhāja īnanī prākuryuṇ. prātibhāvya-vanik-sūlka-madya-dyūta-danḍa na putran adhyābha-veyuṇ.*

(29) *N. i. 10* に「父は男子の債務を支拂うべきでない。愛欲・怒り・スーラ酒・賭博・保證のために作つたものを除いて、男子は父の〔債務〕を支拂うべきである」(*na putranīn pītā dadyād dadyāt putras tu patī kam | kāma-krodha-sūrā-dyūta-prātibhāvya-kṛtān vinā ||*) といふ。cf. *Vi. vi. 33.*

(30) *N. i. 11. pitar eva niyogād yaḥ kutumbabhāraṇāya vā | īnanī vā yaktvān kṛcchre dadyāt putrasya tatpītā ||*

(31) *B. x. 124* に「父は男子が作つた債務にして承認したものを返却すべきである。あるいは子への愛情によつて支拂うべきである。他のときは支拂うに及ばなく」(*īnanī putrakṛtān pītā śodhyaṇ yadanumoditam | sutasnehena vā dadyān nānyā-tiā dātum arhati ||*) といふ。cf. *K. 514* に「父は男子の作つた債務を支拂うべきでなくとは定めである。たが〔父が〕約束したとき、また承認したときでは支拂うべきである」(*īnanī putrakṛtān pītā na deyaṇ itī dharmataḥ | deyaṇī praiśṛitān yat syāt yac ca syād anumoditam ||*) といふ。cf. *K. 579.*

(32) *N. i. 18* (= *K. 569*) に「妻が作つた債務は、夫の至難な時に作つたものを除いて、夫にはなんら關係がなく。家のためのものでなければならなく」(*na ca bhāryāktamnanī pātyur vāpi kathanī bhavet | āpatkṛtād ite puṁsān kutumbārtho hi dastarah ||*) といふ。cf. *K. 578* に「夫が告げて旅立ち、〔妻が〕夫のために作つたものがあるときには、妻が作つた債務を

夫が、母の「債務」を男子が支拂うべきである」(deyañ bhāyākrāmaññāñ bharā putreṇa mātṛkaṁ | bharturathē kṛtañ yat syād abhidhāya gate dīsam ||) ㄅㄏㄏㄏ。cf. N. i. 25.

(33) Y. ii. 49. prāṇamāñ sūryā deyañ patyā vā saha yat kṛtaṁ | svayamīkṛtañ vā yad ṛṇañ nānyat sūṛi dātum arhati ||

(34) N. i. 16 ㄅ「妻は夫が作った債務と男子が作った債務を支拂わなくてもよい。ただし彼女が同意したものであるいは夫とともて作ったものを除く」(na sūṛi patīkṛtañ dadyaḍ ṛṇañ putrakṛtañ tathā | abhyupetaḍ ṛṇe yad vā saha patyā kṛtañ bhavet ||) ㄅㄏㄏㄏ。K. 546 ㄅ「妻は夫あるうは男子とともて、また自分ひとりて作った種類の債務を支拂うべきである。その他て作った債務を「支拂いすべき」なり」(bhartā putreṇa vā sārḍham kevalenātmanā kṛtaṁ | ṛṇam evañ vīḍhañ deyañ nānyathā tatīkṛtañ sūryā ||) ㄅㄏㄏㄏ。cf. K. 547.

(35) N. i. 17. dadyaḍ aputravīdhavā niyuktā vā munuṛṣuṇā | yo vā tadrikṛtamāḍatte yato rikṛtaṁ ṛṇañ tataḥ ||

(36) Y. ii. 46. na yoṣit patiputrābhyañ na putreṇa kṛtañ pitā | dadyaḍ ṛṇe kuṭumbārthāñ na patiḥ sūṛikṛtañ tathā ||  
Vi. vi. 38-9 ㄅ「口で承認したものは家長が支拂うべきである。あるうはある者が家のために作ったものと同じ」(vākprāṇamāñ kuṭumbinā deyañ. kasyacit kuṭumbārthe kṛtañ vā) ㄅㄏㄏㄏ。

(37) Y. ii. 45. avibhaktāñ kuṭumbārthe yad ṛṇañ tu kṛtañ bhavet | dadyaṁ tadīkṛtañ prete proṣite vā kuṭumbini ||

(38) N. i. 3 ㄅ「不分割の叔父・兄弟あるいは母が家のために債務を作ったときには、その相續人がすべてを支拂うべきである」(pitṛvyeṇāvibhaktena bhrātṛā vā yad ṛṇañ kṛtaṁ | mātṛā vā yat kuṭumbārthe dadyaṁ tadrikṛtañ kṛtaṁ ||) ㄅㄏㄏㄏ。K. 846 ㄅ「兄弟・叔父・母が家のために債務を作ったときには、分割のときはその相續人がすべてを支拂うべきである」(bhrātṛā pitṛvya-mātṛbhyāñ kuṭumbārtham ṛṇañ kṛtaṁ | vibhāgākāle deyañ tadrikṛtibhiḥ sarvaṁ eva tu ||)

とある。

- (36) M. viii. 166 にも「もし債務者が死し、[その債務が] 家のために支出がなされたときには、分割された後でも、相続人 (bandhu) は自ら支拂いすべきである」(grahitā yadi naṣṭaṅ syāt kuṭumbārthe kṛto vyayaḥ | dāvayain bāndhavaṁ tat syāt pravibhaktair api svataḥ ||) とある。N. i. 13 (TSS. 版なし) には若干の語を變へてこの規定を繼承している。
- (40) B. x. 121. pṛtya-bhrātṛ-putra-stṛi-dāsa-śiṣy-ānujivibhiḥ | yad gṛhītaḥ kuṭumbārthe tadgṛhī dātum arhati ||
- (41) N. i. 12 にも「弟子・修業者・奴隷・婦女・使用人・代理人が家のために費したものは、家長によつて支拂はるべきである」(śiṣy-āntevāsi-dāsa-stṛi-preṣya-kṛkaraiḥ ca yat | kuṭumbahetor utkṣipatān dāvayain tat kuṭumbina ||) とある。K. 545 にも「旅行しつゝる[家長]に承認をえず、奴隷・妻・母・弟子あるいは男子が家のために作つた債務を支拂うべきであると云ふはさう」(proṣṭasyāmatenāpi kuṭumbārtham ṛṇaḥ kṛtam | dāsa-stṛi-mātṛ-śiṣyair vā dadyāt putreṇa vā bhṛguḥ ||) とある。
- (42) M. viii. 167(= B. x. 115) には「依存しつゝる者でも家のために法律行爲 (vyavahāra) を行うときには、自己の地方でも他の地方でも、主人はそれを取消せなう」(Kuṭumbārthe 'dhyadhīno'pi vyavahāraṁ yām ācareṭ | svadēse vā vidēse vā taṁ jyāyān na vicālayet ||) とある。
- (43) K. 542-3. kuṭumbārtham aśaktena gṛhītaḥ vyādhitena vā | upaplavanimitte ca vidyād āpakṛte tu tat || kanyā-vaiśāhikaḥ caiva pretakārye ca yat kṛtam | etat sarvaṁ pradāvayain kuṭumbena kṛtān prabhoḥ ||

## 二 家産分割

古典ヒンドゥー法にては、第一期から父の死後の家産分割の規定に並んで生前の分割の規定が記されている。生前分割の時期については Ga. xxviii. 2 に「あるいは欲するならば[父の]生存中母の月經が終つたときに<sup>(1)</sup>」とあり、

N. xiii. 34 には、妻の月経が終り、女子が結婚し、自己の性欲が消え、世間的欲望がなくなり、老年に達したときと述べられている。<sup>(2)</sup>

父の生前にては男子は家産について能力がない (antya) と、M などによつて規定されている。すなわち、M. ix. 104 に「父または母の死後に兄弟が集つて父の財産を均等に分割すべきである。両親の生存中には能力がないから」とあり、Devata, SL. 271 も同趣旨である。<sup>(4)</sup> また Ha. iv. 1 には「父の生存中には男子は財産の受贈・贈與・破棄にて獨立 (svatantrya) でなく」とある。<sup>(5)</sup> これらの規定は、家長たる父のみが獨立 (svatantra) であり、両親の生存中には男子がたとえ年をとつていても獨立せず、両親の死後に始めて獨立し、そして非獨立者を法律行爲の無能力者とするというNの規定と同じ意識に立つている。従つて上記の規定は父の生前にて男子が家産を分割することを認めない。N. 563 には「父が」存するときには男子は父の財産を得られない。<sup>(6)</sup> その(財産を得ない) 限り、たとえ裕福であつても、債務者として(父の債務を) 支拂わな<sup>(7)</sup>とあり、父の生前には男子が家産を分割することができず、他方債務を辨済しなくてもよいと規定されている。そして Ga には祖靈の供養を禁ずる者に「父の意志に反して分割する者」<sup>(8)</sup>をあげ、父の認可なくして家産を分割することを否認する態度を示しており、Ba には「父の生存中には(男子は) 父の認可を得て財産を分割する」<sup>(9)</sup>とあり、SL. 270, 274 も同趣旨であり、父の生前の家産分割では父の意志を必要條件としている。<sup>(10)</sup>

そして、父の生前分割の際の男子の相續分はさまざまに規定しており、これについては次節に詳述するが、V, N, B には父が男子の相續分を任意に定めることを積極的に認めていることは注意すべきである。すなわち、V. iii. 114 には「もし父が分割をなすときには、任意に男子に分つてもよい。長男子に最上の分を與えてもよく、すべてに均しい

分を與えてもよ<sup>(11)</sup>』とあり、Y. ii. 116cd, N. xiii. 15 には父の任意な相續分の決定をダルマにかなうものとして權威づけており、さらに B. xxvi. 15 には父の決定にもとる者は罰すべきと規定している。<sup>(12)</sup> また Hā. iv. 5 には、「あるいは〔父は〕生存中に分割して森に入りまたは老年のアーシュラマに入るべきである。あるいは少しを分割し多くを取つて住み、もし失えば再び彼ら（男子）から取り、失つた者には分つべきである」<sup>(13)</sup>とあり、父が生前に家産を分割する際に自己の分として財産を留保し、しかもその財産を任意に處分することを認め、しかもその財産を消費すれば男子から財産を得ると述べている。この父が留保する財産については、N と B とはともに男子の相續分の二倍と規定している。<sup>(14)</sup> 以上のように、父は家産についての大きな權限を認められている。

父の死後の分割は父の權利が存在しないため生前分割と著しい相違がある。つまり父の權利は死亡によつて消滅し、また父が遺言によつて遺贈しあるいは男子の相續分を指定することは見られない。従つてこの場合には男子が家産を分割する主體となる。そして B. xxvi. 59 によつて、父の特有財産は父の死後には家産と並んで男子によつて分割され、また父が生前分割にて留保した財産とその後にて取得した財産についても、分割後に生れた男子がいなければ、同じく父の死後には男子によつて分割される。

また N. xiii. 16 には「父が病氣であるか、怒り狂つてゐるか、世事に心を奪われているか、またシャーストラに違ふ行爲をしているときは、父は分割する主人（prabhu）でな<sup>(15)</sup>』とあり、これは父の缺格の規定であつて、この場合には父の死後と同じく男子が家産を分割する主體となる。そして SL. 270, Hā. iv. 3 には、父の缺格のときには、長男子が家産を管理し家の事件（kūṇbhavyavahāra）を行うことを規定してゐる。<sup>(16)</sup>

それでは家産分割とはどのような效力をもつものであろうか。このことについては N の規定が最も明瞭に示してい

る。すなわち、「贈與・受贈・家畜・食物・家屋・土地・奴隸・料理・祭儀・收入・支出は分割者にあつては別々である」と知るべきである<sup>(18)</sup>とあり、家産分割後には、男子はそれぞれ家屋・土地などの財産を異にし、生計・食事・祭儀を別にし、相續財産を任意に贈與・賣却する能力をもち、獨立者<sup>(19)</sup> (svatantra) となる。つまり家産分割によつて男子を家父長とする新しい家族が成立する。そして分割前には認められなかつた贈與・受贈についての證言、保證および債務が、分割した男子の間にては認められる<sup>(20)</sup>。しかし「財産分割後にてさへも、この世ではだれも一人では權利をもつていない。ただ保有 (bhoga) だけ行ふべきで、贈與も賣却もできない<sup>(21)</sup>」。「分割した者もしない者も相續人 (dayāda) は不動産については均等である。すなわち一人ではすべてにおいて贈與・質入・賣却する能力がない<sup>(21)</sup>」とあり、分割後にも家産ことに不動産が相續人の共有に屬し、一人では處分できないという。このような規定は古典ヒンドゥー法の最末期に見えるに過ぎず、これを除けば、古典ヒンドゥー法にては家産分割によつて男子が財産・居住を別にすると解釋して支障なく、このことは後述の不分割の財産の規定、および分割認知の規定<sup>(22)</sup>によつて裏書される。そして家産分割前には家族の成員が同居してともに祭儀<sup>(23)</sup> (yajña) を行ふが、分割後男子が家屋を異にし祭儀を別にするので、Ga. xxviii. 4 にさうように、「分割後には祭儀が増える」(vibhāga tu dharmaṇviddhi)。従つて家産分割はダルマにかなうものとして推奨されている。

なお財産のうちで分割することなく相續人の共有に屬すべきものを指定する規定と、これに反對してすべてを分割すべきとする規定が對立している。前者としては、Ga. xxviii. 46-47 は水・宗教的用途のもの (yogakṣema)・調理食・女「奴隸」の四種を不分割の財産に指定<sup>(24)</sup>し、M. ix. 219 = Vi. xviii. 44 はこれを繼承しつゝさらに衣服・乗物・裝飾品・牧地 (pracāra) を加えて八種とし<sup>(25)</sup>、これと類似の規定は SL. 278, K. 884, 882-3, Vy. ii. 147 で見える<sup>(26)</sup>。



これに對して、BはCのいう不分割財産を一々とりあげて、例えば、衣服・裝飾品は賣却して、調理食は調理してない食物と取換えて分割し、奴隷も一人のときは相續分に應じて勞働せしめ、多數のときは均等に分割するというように、Dの規定に反對して徹底した分割を述べており、D 82にも家具・乗物・裝飾品などを分割すべきことを述べ、<sup>(28)</sup> Bと同趣旨である。

以上のように家産を父の死後あるいは生前に分割することを規定しているが、父の死後にも男子がその家産つまり相續財産を分割することなく居住をともにして生活を續けること——*avyabhakta*（不分割者）と表現される——について記されている。しかし不分割家族に關する規定は僅かであり、このことは不分割家族にても父を長とする家族についての規定が適用されることを示すに他ならない。そして前述のように父の死亡によつて父の權利が消滅するので、不分割家族にてはその男子の家産に對する權利は父を長とする家族の場合と異なる筈であるが、これについては規定されていない。ただ B. xxvi. 18 には「同居者によつて得たものは、そこではすべてに均等の分をもつ。その男子は均等であれ不均等であれ父の分をとると宣べられる<sup>(29)</sup>」とあり、家産や取得産について共同關係をもつことが明記され、父を長とする家族に準じた男子の相續が述べられている。そして家長 (*grihin, kufumbin*) を立て、彼が家産を管理し、家のために負つた債務を辨濟し、家族員もその債務の辨濟責任を負擔し、分割後にも責任が及ぶこと、前節述べたとおりである。

さらに「分割した後に、父・兄弟あるいは叔父が愛情をもつて再び一緒にするときには、それは *samsistim* とされる<sup>(30)</sup>」(B. xxvi. 113) とあるように、家産分割後に父子・兄弟・叔父甥という男系近親間にて再び財産を共同にし居住をともにする家族について規定されている。B. xxvi. 106 ㉔「*samsistim* が再び愛情をもつて」一緒にするとき





kāyaṃ asvaṃtras tathaiṃva ca | akītaṃ teḍ iti prāhur dharmasāstravidō janāḥ ||) ㄅㄆㄇㄉ° cf. K. 465-471.

(7) K. 563. yāvan na pitṛkaṃ dravyaṃ vidyamanāṃ labhet sutāḥ | susaṃrddho' pi dāyaḥ syāt tāvaṃ naiv-  
ādhamaṇikaḥ ||

(8) Ga. xv. 19 pitṛā cākameṇa vibhaktān.

(9) Ba. ii. 2. 3. 8. pituraṇumatyā dāyavibhāgaḥ sati pitari.

(10) ŚL. 270 ㄴ 「父の意欲に反して財産を分割せむなら」 (na tv akāme pitari ickhavibhāgaḥ.) ㄅㄆㄇㄉ° ŚL 274 ㄴㄹ 「ㄆㄇㄉは父の生存中は「父が」認可して分割する」 (jivati vā pitari ickhavibhāgo' numataḥ.) ㄅㄆㄇㄉ°

(11) Y. ii. 114. vibhāgaṃ cet piā kurvād icchayā vibhajeṭ sutān | jyeṣṭhaṃ vā śreṣṭhabhāgena sarve vā syuḥ sam-  
ānśinaḥ ||

(12) Y. ii. 116cd ㄴ 「より少くより多く分割しても、父が行つたものはまゝに聽うと言ふのである」 (nyūnadhikavibhaktā  
nān dharmyaḥ pīṭkṛteḥ smṛtaḥ ||) ㄅㄆㄇㄉ° N. xiii. 15 ㄴ 「父はより少く、より多く、ㄆㄇㄉは均して財産を分けて彼ら  
(男子) に分けるとき、それはまゝにかなう。すなわち父はより多くの者の主人 (prabhu) にㄆㄇㄉなら」 (pitaraiva tu vi-  
bhaktā ye hīnādhikasameir dhamaḥ | leṣāṃ sa eva dharmāḥ syāt sarvasya hi piā prabhuḥ ||) ㄅㄆㄇㄉ° ㄴㄹ N. xiii.  
4 ㄴㄹ 生前分割の場合に父が任意に男子の相續分を定めることを認めつつゐる (前註の参照)。

(13) B. xxvi. 15 ㄴ 「父が均しく、より少く、より多く分を定めたところのものを、そのまゝにㄆㄇㄉはㄅㄆㄇㄉである。反する  
ㄅㄆㄇㄉは斷たずㄆㄇㄉである」 (samanyūnādhikā bhāgaḥ pitṛā yeṣāṃ prakalpitāḥ | tathaiṃva te pālantiyā vineyās te syur  
anyathā ||) ㄅㄆㄇㄉ°

(14) Hā. iv. 5. jīvaṃ eva vā putrāṃ pravibhajya vanam āśrayet, vṛddhāśramam vā gaocchet. svalpema vā vibhajya  
bhūyīṣṭhaṃ ādāya vaset, yady upadasyet punas tebhyo gṛhṇiyāt, kṣīṇāś ca vibhajeṭ.

(15) N. xiii. 12ab ㄴ 「父は分割するとき自ら二つの分を取るゝきじある」 (dvāvanīsau pratipadyeta vibhajanm ātmaneh pītā ㄴ) ㄴㄱㄹ B. xxvi. 16 ㄴ 「生前の分割の際に父は自ら二つの分を取るゝきじある」 (jivadvibhāge tu pītā gṛhṇitānīśa-dvayanī svakam ㄴ) とある。また ŚL. 268 ㄴ 「男子一人ならば、彼(父)は自ら二つの分を取るゝきじである。奴隸・四足獸・動産を加へて」 (sa yady ekaputraḥ syād dvan bhāgāv ātmaneh kuryād dvipadacatṣpadesu rūpam adhikam.) ㄴㄱㄹ。 (ekaputra ㄴㄱㄹㄴㄱ Kāne: HDh. iii. p. 625. n. 1191. 参照。) なㄱK. 838 ㄴ 「父と兄弟が財産から生じたものすべてを均しい分にて取ることを、ダルマになつた分割といわれる」 (śekalanī dravyajātān yad bhāgair gṛhṇanti tatsameḥ | pitaro bhātaraś caiva vibhāgo dharmya ucyate ㄴ) とあり、これは増加した財産について父が男子と均等の分割を得ることを意味するものである。

(16) N. xiii. 16. vyādhīṇaḥ kupitāś caiva viśeṣasaktamāna saḥ | anyathāśāstrakārī ca ne vibhāge pītā prabhūṭ ㄴ

(17) ŚL. 270 には「父が能力のないときは長男子が家の事件を行ふべきである。あるいは彼の同意を得て事件に熟知した他の者が。父の意志に反して財産を分割できない。〔父が〕年老いたり、心が狂亂したり、長期の病氣のときには、長男子が父のよつて他の者の財産を守るべきである」 (pitary aśakte kuṭumbavyavahāraṁ jyeṣṭhaḥ kuryād anantaro vā kāryajñas tad-anunnatena, na tv akāme pitarī kṛtānvibhāgaḥ. vṛddhe viparītacetasi dīrgharogīṇi vā jyeṣṭha eva pitryad arthān pālayed itareṣām.) ㄴㄱㄹ Hā. iv. 3 ㄴ 「〔財産〕を浪費し、旅行し、あるいは病氣するときは、長男子が財産を見るゝきじある」 (kāmādāne proṣṭhe cātinī gate vā jyeṣṭha evārtānās cintayet.) とある。

(18) N. xiii. 38. dāna-grahaṇa-pāśv-anna-grāha-kṣetra-parigrahaṇāḥ | vibhaktānāṁ pṛthag jñeyāḥ pāka-dharm-āgamar-vyayāḥ ㄴ

(19) N. xiii. 43 ㄴ 「自分の分から贈與・賣却するならば、自分の財産に能力があるから、すべてを任意に行ひつゝ」 (svān-bhāgān yadī dadāyus te vikṛtīṇānām athāpi vā | kuryur yathēṣṭam tat sarvaṁ iśās te svadhamasya tu ㄴ) ㄴㄱㄹ。

- (20) Y. ii. 52 に「兄弟・夫婦・父子の間では、不分割の場合には、保證・債務・證言ができないと宣べられる」(bhṛātṛiṇām atha dāṇpatyoh pituḥ putrasya caiva hi | prābhāvyaṃ rīṇāṃ sāksyaṃ avibhakte na tu smṛtaṃ ||) とある(N. xiii. 39(=B. xxvi. 6) には「分割した兄弟は互に贈與・受贈・證言および保證することができが、不分割(の兄弟)はできない」(sāksivān prābhāvyaṃ ca dāṇāṃ gṛahāṇaṃ eva ca | vibhaktā bhṛātaraḥ kuryur nāvibhaktā paraspāram ||) とある。
- (21) loke rikthavibhāge' pi na kaścit prabhutāmnyāt | bhoga eva tu kartavyo na dānaṃ na ca vikrayaḥ || vibhaktā avibhaktā vā dāyādāḥ (or sapīḍāḥ) śhāvare samāḥ | eko hy arśaḥ sarvatra dānādāṇamanavikṛaye || 前の規定は K. 853 に採録され、後の規定は Mt. i. 1. 30 に法典名を記せしむるが、K. 854 (Apa. p. 757), Vy. ii. 139 (DB. ii. 27), B. xiv. 8 に採録せしむる。また Vy. ii. 138 には「ホートラの共同財産の全不動産を、互の同意なしでは、だれ一人も贈與・賣却できない」(śhāvareṣu samastasya gotrasādhāraṇasya ca | naikaḥ kuryāt kṛayaṃ dānaṃ paraspāramataṃ vinā ||) とある。

- (22) 第三期法典には次のような分割認知の規定があり、相続人がそれぞれ別に祭儀や法律行為を行う場合、あるいは彼らの間にて法律行為を行う場合には、彼らは家産を分割したものと見做される。すなわち、N. xiii. 41 に「自己の相続人の間にて公然と行爲を行うときには、たとえ文書がなくとも、他人は彼らを分割したと見做すべきである。十年間祭儀を異にして行爲を異にして住むときは、兄弟は分割したと知るべきである。これは定めである」(yeśāṃ tāṃ kriyā loke pravartante svarikṭhi-nām | vibhaktāṃ avagaccheṣur alekhyam apy antareṇa, tāṃ || vāseṣur ye deśādāni pṛthag dharmāḥ pṛthak kriyāḥ | vibhaktā bhṛātaraḥ te tu vijñeyā ṭi mīcayāḥ ||) とある(B. xxvi. 147 に「別々の収入・支出・財産・金貨・商業を互に別々に行ひしむるとき、分割ししむるに疑ふな」(pṛthag āvayavādhanāḥ kusidāṃ ca paraspāram | vanikpāthāṃ ca ye kuryur vibhaktāḥ te na smiśyeyāḥ ||) とある K. 893 45 N. xiii. 41 と同趣旨 (ab 5 同文)。

- (23) N. xiii. 37 に「不分割の兄弟であつては一つの祭儀が行われる。分割すれば、祭儀は彼らの間と別々に属する」(bhṛātṛi-

nām avbhaktānām eko dharmah pravartate | vibhāge sati dharmo hi teṣāṃ bhavet pṛthak pṛthak ॥ ㄅㄆㄷㄹ B. xxvi 5 ㄹ 「祖靈・神・ミナモトを一つの料理にㄅㄆㄷㄹ居住して崇拜」・分割した者の間では家ゝゝに屬する」(ekapākena vasatāṃ pitṛdevadvijārenam | ekaṃ bhaved vibhaktānāṃ tad eva syād grhe grhe ॥) ㄅㄆㄷㄹ ㄱㄴ V. ii. 131 ㄹ 「親の生存中は同居すると定められる。その死後に分割され、彼らの間に祭儀がㄅㄆㄷㄹ」(bhrāṭṛāṃ jīvatoḥ pitroḥ sahavyāso vidhiyate | tadabhāve vibhaktānāṃ dharmas teṣāṃ vivandhate ॥) ㄅㄆㄷㄹ cf. M. ix. 111.

(24) Gā. xxviii. 46-47. udaka-yogakṣema-kṛtāṃeṣv avibhāgaḥ. strīṣu ca saṃyuktāsu.

(25) M. ix. 219=Vi. xviii. 44. vastram pattam alankāraṃ kṛtāṃam udakaṃ strīyaḥ | yogakṣemaṃ pracāraṃ ca na vibhājyaṃ pracakṣate ॥

(26) ŚL. 278 ㄹ Prajāpati の言ㄅㄆㄷㄹ宅地 (vastu)・水・文書・裝飾品・upayukta・女〔奴隸〕衣服・āpa・牧地・乗物をあづか。K. 882-3 には文書に記された財産・祭儀のために指定されたもの・水・奴隸・傳來のニハズ・着用した衣服・裝飾品をあづか。「適當な時に使用するよゝに相続人に使用される」(883cd. yathā kalopayogyāni tathā yojyāni bandhubhiḥ ॥) ㄅㄆㄷㄹ K. 884 ㄹ Bṛhaspati の言ㄅㄆㄷㄹ牧牛場・道路・衣服・prayojya・祭儀のためのものを不分割の財産と規定ㄅㄆㄷㄹ V. ii. 146=Uśana (Mit. i. 4. 26) には「犧牲のためのもの・土地・調理食・文書(あるいは器具)・水・女〔奴隸〕は、サハートラであつては十代目に至つてゝえも分割されなゝ」(avibhājyaṃ sagotrāṇāṃ ā sahasakulād api | yājyaṃ kṣetram ca pātrāṃ (or pātrāṃ) ca kṛtāṃam udakaṃ strīyaḥ ॥) ㄅㄆㄷㄹ

(27) B. xxvi. 47, 50, 51, 3, 2, 52 (規定の順序は Kṛt. Vy. pp. 680f., Apa. p. 726, Jolly: SBE. xxxiii. pp. 382 ㄹㄅㄆㄷㄹ) すなわち、「衣服などは分割されなゝといわれたが、彼によつては定められない。富裕な者の財産は衣服・裝飾品によつてゐる。そのままであつては生計手段とならず、どの一人にも與えることができない。〔故に〕熟達をもつて分つべきである。そうでなければ無益である。衣服と装身品は賣却して、文書は債務を辨済して、調理食は未調理食にかえて、分つべきである。井戸

と池の水は「相續分に」應じて引いて取り、溝渠と土地は分に應じて分つべきである。一人の女(「奴隸」は分に應じて家々にて勞働を行わしむべきである。多數のときは均しい分にて與うべきである。これは男奴隸にも適用する。宗教的用途のもの(yogakṣema)のために得たものは均しく分つべきである。牧地は相續人とともに分に應じて用うべきである」(vastrādayo 'vibhājyā yair uktam tair na vicāritam | dhāmam bhavet samrddhānam vastr-ālanikāra-senśritam || medhyasthitam anājī-vyam dātum naikasya śakyate | yuktyā vibhajanyam tad anyathā 'narthakan bhavet || vikṛtya vastrābharanam iṣam udgrāhya lekhitam | kṛtāmam cākṛtāmena parivartya vibhajyate || uddhṛtya kupa-vāpy-ambhas tv anusāreṇa grhyate | tathā bhāgānusāreṇa setuḥ kṣetram vibhajyate || ekām strīm kārayet karma yathāśīsa gṛhe gṛhe | bahvyaḥ samānśato deyā dāsānam apy ayaṁ vidhiḥ || yogakṣemavato lābhaḥ samatvena vibhajyate | pracārāś ca yathāśīsa kartavyo iktihbhīḥ saha ||) ㄴ。

(28) K. 842 (=B. xxvi. 40) ㄴ「家具・乗物・乳牛・裝飾品・奴隸(karmin)——目に見えるものは分割し、隠したものは神判にて確めるㄴㄴㄴ」(gṛhopaskara-vāhyāś ca dohy-ābharāṇa-karmināḥ | dīṣyamānā vibhajyante kośam gūḍhe bravīd bhṛgūḥ ||) ㄴㄴㄴ K. 841 ㄴ問題ㄴㄴㄴ。

(29) B. xxvi. 18. samavetais tu yat prāptam sarve tatra samānśinaḥ | tatputrā viśamasamāḥ pitṛbhāgārahāḥ smṛtāḥ || 不分割家族の成員の男子の相續てゐるは第三節註17を参照。なお Y. ii. 120 ab ㄴ「共同財産を増大したときには分割は均等であると宣ぐられる」(sāmānyārthasamutthāre vibhāgas tu samāḥ smṛtāḥ ||) ㄴあり、同居家族の場合には取得産がその財産に繰入れられ、しかも分割に際しては成員に均等に分割すべきことを規定してゐる。これに對して Kaṭ. iii. 5. p. 160 には「共に生活した者は、いまた父の財産を得てない者も父の財産を分割した者も、再び分割すべきである。〔この場合には財産を〕増大した分(あるは二つの分)を得べきである」(apitṛdravyā vibhaktapitṛdravyā vā sahajivantaḥ punar vibhajeran. yataś cotiśheta sa rddhyaniśam(or dyanīsam) lābhetā.) ㄴあり、同居家族にあつては、取得産はその家



産に繰入れられるが、分割に際しては財産を増大した成員は特別の分割分を得ると規定している。

- (30) B. xxvi. 113. vibhaktō yaḥ punaḥ pitṛā bhṛātṛa caikatva sanishtaḥ | pitṛvyenāhavā prītyā tat sanisṣṭāṇ sa  
ucyate ||

- (31) B. xxvi. 106. sanisṣṭau yau punaḥ prītyā tau paraspṛabhāḡinau ||

- (32) B. xxvi. 112. sanisṣṭānān tu yaḥ kṣācīd vidyā śauryādina dhanam ||

- (33) Ga. xxviii. 28 ㊦「sanisṣṭin な死すれど sanisṣṭin な財産をもつ (rikthabhak) となす」。

- (34) V. ii. 139 (=B. xxvi. 117) ㊦「sanisṣṭin が異胎の兄弟の財産を取りえつても、異胎の兄弟はその財産を取れなす。sanis-  
ṣṭin となす者は同胎の兄弟のそれを得つも、他の母から生れた者のは得られなす」(anyodaryas tu sanisṣṭī nānyodaryo  
dhanan harēt | asanisṣṭy api cādadyāt sodaryo nānyamātrīḡāḥ ||) となす。なす V. ii. 138. =Vi. xvii. 17 (=B. xxvi.  
116) ㊦「生れまたは死ぬるときは、sanisṣṭin は sanisṣṭin のを、同胎の兄弟は同胎の兄弟のを與えまたは取るべき也。

㊦」(sanisṣṭinas tu sanisṣṭī sodarasya tu sodaraḥ | dadyād apaharec cānīśan jātasya ca mītasya ca ||) となす。

- (35) N. xiii. 24-25. sanisṣṭānān tu yo bhāgas teṣām eva sa īsyate | anapatyo'nśabhāḡyo' pi nibhīṣy itarān-  
yāt || bhṛātṛpām aprajāḥ preyāt kṣācīc cet pravrajat tu vā | vibhajeran dhanan tasya śeṣās tu stṛdhanan vinā ||

- (36) M. ix. 210 = Vi. xviii. 41. vibhaktāḥ saha jīvanto vibhajeran punar yadi | samas tatra vibhāḡaḥ syāj jyaṣṭhyan  
tatra na vidyate || cf. M. ix. 212.

- (37) B. xxvi. 106 ㊦「分割した後で兄弟が愛情をもつて一緒になり、再び分割をなすときは、彼らの間に長男子分が存在し  
なす」(vibhaktā bhṛātaro ye tu samprīty-aikatva sanishtaḥ | punar vibhāḡakarane teṣān jyaṣṭhyan na vidyate ||) となす。

### 三 相續人

前述のように、相續人は男子である。古典ヒンドゥー法は二人以上の同等および劣等の種姓の出自の妻を娶ることを認め、それらの妻から生れた子を嫡出子としているが、その男子は生母の種姓によつて相續分を區別している。<sup>(1)</sup>ま

法 典													
子の種類 M. ix. 158-160 による													
1	aurasa 嫡出子	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	kṣetrāja 田生子	2	2	3	3	2	2	3	3	2	3	3	3
3	datta 與子	3	8	4	7	8	9	9	9	9	9	7	4
4	kṛtina 養子	4		5	9	12	11	10	11	10	11	9	6
5	gṛdhotpanna 秘生子	5	6	6	4	6	6	5	6	6	4	4	9
6	apaviddha 拾得子	6	11	7	12	11	8	10	9	7	5	6	8
7	kānina 未婚女の子	7	5	8	5	5	4	10	4	4	5	5	10
8	sohoda 共婚子	8	7	9	11	7	5	11	8	10	12	11	11
9	kṛta 買子	12	9	10	8	9	10	6	4	3	8	4	7
10	paunarbhava 再婚女の子	9	4	11	6	4	7	9	12	11	10	4	12
11	svayandatta 自與子	11	10	12	10	10	12		11	10	12	10	5
12	sandra シュードラ女の子		12	13				8	11			12	13
	putrikāputra 指定女の子	10	3	2	2	3	3	2	3	2	2	2	2

た次表のように非嫡出子を十一種（シュードラ出目の妻の男子を含めると十二種）をあげ、嫡出子（*anagata*）を含めて上位の六種の男子を相續人とし、他の男子を非相續人とするなど、相續にて區別してゐる。<sup>(2)</sup>これらについては別稿に譲り、ここでは同一種姓出自の妻から生れた男子について述べる。なお第二期以後には妻および女子の相續が認められたが、これについては次稿にて述べる。

古典ヒンドゥー法にては成年者と未成年者とを區別することは一般的とはいいがたいが、既に第一期には未成年者の規定があり、<sup>(3)</sup>「おおよび<sup>(4)</sup>は十六歳をもつて成年とする。成年に達する（*vyavahataprapāṇa*）」とは語義から考えれば法律行為の能力者となることであらう。<sup>(5)</sup>そうすると未成年者は無能力者である。N. 8. 24b には「成年に達した者に分割することが定められる」とあり、<sup>(6)</sup>家産分割にて相續財産を享有できるのは成年男子である。そして N. 8. 25 には「未成年者の財産は支出を除いて *bandhu*・友人に預くべきである。旅行者のそれも同じ」とあり、<sup>(7)</sup>未成年者の相續財産は成年に達するまで保管すべきことが規定され、さらに王が *strīdhana* と並んでこれを保護すべきことが規定されている。<sup>(8)</sup>不在者の相續財産も同じく保管・保護される。<sup>(9)</sup>なお N. xiii. 33-34 には男子のうちでいまだサンスカラを行つてない者には、兄が「父の財産」をもつてサンスカラを行い、その財産がない場合には兄が相續財産を出して行ふべきことを規定しており、<sup>(10)</sup>Vy. ii. 135, B. xxvi. 27 も同趣旨である。<sup>(11)</sup>すなわち男子のサンスカラは父が行ふべきものであり、父の死後には「父の財産」あるいは父からの相續財産をもつて兄が行う。

生前分割後に生れた男子の相續については規定が對立してゐる。Y. ii. 122, Vi. xviii. 3 は既に相續財産を得た男子がその男子に財産の一部を與えることを規定し、その男子が遡つて分割前の家産の相續人であることを認めてゐる。<sup>(12)</sup>これに對して Ga. xxviii. 29, M. ix. 216, N. xiii. 4 にはその男子のみが父の財産を相續することを規定し、<sup>(13)</sup>B. xxvi.

55-57 には、その男子は父が生前分割にて留保した財産とその後に取得した財産を相續し、既に分割した男子の相續財産には權利がなく、同様に分割した男子は父の財産には權利がないと規定し、<sup>(14)</sup>従つて生前分割後の父と男子の各の財産を明確に區別している。

次に男孫については代位相續が認められる。相續人となるべき男子が相續財産を繼承する前に死亡して、彼に男子がある場合については、Y. ii. 120cd に「多くの父がいる男子の間にあつては父に従つて分が定められる」<sup>(15)</sup>とあり、男孫が父たる男子の相續分に應じて家産を相續することが規定され、Vi. xvi. ii. 23 も同趣旨である。<sup>(16)</sup>さらに N. 855-6 は次のように明瞭に規定している。「まだ分與されていない弟が死ぬときは、彼の男子が、祖父から生計費を得ていない場合には、財産の分をもつ。彼は父の分を彼の叔父あるいはその男子から得る。それはすべての兄弟の間の正しき分であるべきである。あるいは彼の男子が得る。その後は失う」<sup>(17)</sup>と。ここに男孫、男孫がいなときは男曾孫が父あるいは祖父と同じ順位にて家産を相續すること、そして男曾々孫はその權利を失うことを規定している。

相續人は積極財産とともに消極財産（債務）を相續する。<sup>(18)</sup>Y. ii. 117ab に「兩親の死後男子はその財産と債務とを均しく分つべきである」<sup>(19)</sup>とあるのは、このことを示している。そして Gr. を始めとして古典ヒンドゥー法を通じて、飲酒・愛欲・賭博・無益な贈與・保證などによつて生じた父の債務と、父の罰金・租税の殘額について、男子が辨濟責任を負擔しないことを規定しており、<sup>(20)</sup>従つて相續人たる男子が相續する債務は、父が家と關係なく獨自に負つたものを除外して、家のために負つたものに限られる。

Vi. vi. 35-36 には「父の債務は分割してゐない兄弟に屬し、分割した「兄弟」は財産に應じた分を負う」<sup>(21)</sup>とあるように、父の死後未分割のときには共同して辨濟し、分割後には相續分に應じて辨濟する。このように男子が父の債

務を辨済するのは父の死後あるいは家産分割後であるが、ただ父が病氣・狂亂・老衰・旅行によつて缺格する場合に父の死後と同じく男子が辨済する。<sup>(22)</sup>このことは前節に述べたように父の缺格によつて男子が家産および家産分割の主體となることに相應する。ただしこの場合には二十年の辨済猶豫期間が認められてゐる。<sup>(23)</sup>

男子が父の債務を辨済できないときは、男孫にその辨済責任が及ぶ。このことは Y. ii. 50, Vi. vi. 27, N. i. 4, B. x. 113, K. 555-6 に規定されてゐる。<sup>(24)</sup>そして N. i. 4 に「男子が傳來のたえざる〔財産〕を得て債務を返却しなるときには、男孫が祖父〔の債務〕を支拂うべきである。四代目には免かれる」<sup>(25)</sup>とあり、K. 560 も同趣旨である。<sup>(26)</sup>古典ヒンドゥー法の親等の計算方法は自己を含めて計算するのであるから、四代目の直系卑屬は曾孫である。B. x. 114 には「定められれば男子は〔父の〕債務を自己のごとく支拂うべきである。〔男孫は〕祖父の〔債務の〕元金を支拂うべきである。だがその男子は支拂わなくともよい」<sup>(27)</sup>とあり、ここに男曾孫に至つて辨済責任が免かれることを規定し、N, K と一致してゐる。<sup>(28)</sup>

しかし相續能力なき男子についての規定がある。この規定は Ap. ii. 6. 14, I, Ga. xxviii. 43-44, Va. xvii. 52-54, Ba. ii. 2. 3. 43-45, M. ix. 201-202, Vi. xv. 32-39, N. xiii. 21-22, Devaia に記されており、相續缺格者として次の者があげられてゐる。(一) Patita(自己の種姓から除外された者)、(二) 性無能力者、(三) 精神錯亂者、(四) 精神薄弱者、(五) 盲人、(六) 病人など。<sup>(29)</sup>そして patita を除いて相續缺格者を衣食をもつて扶養すべきことを規定し、缺格者の男子が、同じく patita の男子を除いて、缺格の事由がない場合には、缺格者に代位して相續人となることを認めてゐる。<sup>(30)</sup>

次に相續形態について述べる。前節述べたように、古典ヒンドゥー法は、父の生前の家産分割にては、父自身ある

いは父の認可を得て男子が分割し、その際に父が一部の財産を留保すること、および男子の相續分を任意に定めることを認めているが、父の死後の分割には父の権利が存在せず、男子が分割の主體となることを規定している。このように父の生前と死後とにては著しい相違があるが、相續形態については、時期を明記しないものが多く、また上記の他には生前の規定が死後のそれと相違がないので、以下まとめて述べることにする。

まず Ap には、「長男子が相續人であるとする者はいう」と、長男子の單獨相續を一説として掲げているが、「それはシャーストラによつて禁じられる」とあつて、これを否認し、次いで「タイティリーヤ・サンヒター」(Taittiriya Saṁhita iii. 1. 9. 4)を引用して、「マヌが男子に財産を分つたというのは、差別しないことと聞かれる」と、均等分割を權威あるものとして記している。<sup>(31)</sup>このことは同じタイティリーヤ學派に屬する Ba も同じである。<sup>(32)</sup>そして古典ヒンドゥー法典のすべてに均等分割の規定がみられ、<sup>(33)</sup>均等分割が原則のようである。だが均等分割によつて相續の規定が貫かれてゐるわけではなく、長男子の單獨相續、不均等分割も記され、また特別分もさまざまに規定されており、しかも各法典にこれらの規定が並記されているのである。ここに古典ヒンドゥー法の一性格を見ることができよう。

長男子の單獨相續については、Ga. xxviii. 3 に「あるいはすべてが長男子に屬す。〔彼は〕父のごとく他の者を扶養すべきである」<sup>(34)</sup>とあり、また前述のように Ap はこれを一説として記している。次いで Ba に長男子の單獨相續が述べられてゐることは有名であつて、次掲の規定 (ix. 105-108) はしばしば引用されている。すなわち、「長男子のみが父の全財産を取るべきである。他の者は父の「もとにおける」ごとく彼のもとにて生活すべきである。長男子の誕生によつて人は直ちに putra (男子をもつ者) となり、父祖の負い目から免かれる。それ故に「長男子は」すべてを「取る」

に價する。「父は」彼に負い目を負わせ、彼によつて不滅をうる。彼こそはダルマのために生れた子であり、他の者は愛欲から生れた子であると知るべきである。父が子「を扶養する」ごとく、長男子は弟たちを扶養すべきである。

「弟たちも」子「の父に對する」ごとく長兄に對してダルマに従つて振舞うべきである」<sup>(35)</sup>と。しかしこれらの長男子單獨相續規定は古典ヒンドゥー法にては例外的と見做すべきである。すなわち、男子が家産を分割するのが相續の基本原理であるばかりでなく、B. xxvi. 17 には「相續人の間の分割には二種が述べられる。一つは年齢の多い順序に、他は均等に分を定める」とあつて、<sup>(36)</sup>均等分割と年長の男子を優先する不均等分割とが記されているが、長男子の單獨相續が見えず、そして上記の三法典以外にはその規定を見出すことができないことから知られよう。

さらに前述のように、St. 270, Ha. iv. 3 には、父が老衰などによる缺格のときに長男子が家産を管理し他の者を扶養することを規定しているが、この場合には他の男子が長男子の同意をえて彼に代ることを認めている。<sup>(37)</sup>また夙に Ba に「品行よき者は他の兄弟の扶養者となる」<sup>(38)</sup>とあり、N. xiii. 5 には「あるいは望むならば、長兄は父のごとくすべての者を扶養すべきである。あるいは有能であれば弟「でもよい」。「すなわち」家族の幸福は彼の才能によるから」<sup>(39)</sup>とあり、ここでは長男子であることに並んで才能が重じられ、弟であつても兄弟を扶養することが認められてゐる。

不均等分割規定は *adisa* をもつて男子の相續分を表わす。<sup>(40)</sup>例えば、「長男子は二つの分 (*adisa*) を取る。他の者にはそれぞれ一つずつである」(Ga. xxviii. 9-10) あるいは「長男子には多い分を、末男子には少い分を、残りの男子には均しい分を分つと知るべきである。また未婚の女子も同じ」(N. xiii. 13) があげられる。<sup>(41)</sup>この種の規定では次に述べる特別分の規定と同じく、長男子に他の男子より多い相續分あるいは特別分を認めることがほとんどすべ

ての規定に見られ、しかも長男子のみに認めるという規定が少くない<sup>(42)</sup>。

特別分 (nadhara) は男子に均等分割するにあたつて特定の男子に特別に與えるもので、それは財産の特定の部分と特定の財産との二種類が見られる。前者には、例えば「長男子は十分の一を取るべきであり、残りのものは均等に分つべきである」<sup>(43)</sup> (Ba. ii. 2. 3. 6-7) とあり、この規定に見える全財産の十分の一があげられる。後者ではその主要なものは家畜であつて、最も尊重される牛は長男子の特別分である。その他には乗物・家具・家屋・穀物などが記され、家屋は Ga, Va, Su には末男子の、Ha には長男子の特別分とされている<sup>(44)</sup>。これらの特別分の規定は第一期および M に多く見られるが、その後は Su, Ha に記されているに過ぎない。

最後に、古典とインドゥー法典のすべては男子なき場合の相續順位について規定している<sup>(45)</sup>。これらの規定にては、Ap に「男子がいなくときには最も近いサビングダが、それがいないときには師匠 (gacarya) が、師匠がいなくときには弟子 (antevāsin) が「その財産」を取る<sup>(46)</sup>」とあり、あるいは V には、相續順位を記した規定に續いて、「彼らのうち前掲の者がいないときには、順次に後掲の者が男子なくして天に昇つた者の財産を取る。これはすべての種姓に適用する<sup>(47)</sup>」とあるように、多くは前掲の者が後掲の者に優位することを規定している。だが前記の Ap の規定に續いて「あるいは女子が」とあるように、その相續順位が明瞭でないこともある。いまこれらを表記すると次頁の如くである。

ここにて次の六項が注目される。(一)妻と女子とは V, Vi 以後にては第一順位に記されているが、それ以前には僅かに Ap, Ga に見えるに過ぎない。この點については次稿にて述べる。(二)父母・兄弟および兄弟の男子は、同じく V, Vi 以後に妻と女子に次いで記されているが、M. ix. 185cd に「父と兄弟は男子なき者の財産を取るべき



相續順位 法典	1	2	3	4	5	6	7	8	9
Âp. ii. 6, 14, 2-5.	サビソダ	師匠	弟子	女子	王				
Ga. xxviii. 21, 41.	サビソダ	サゴート ラ	サテラ ヅ	妻	王				
Va. xvii. 81-83.	サビソダ	師匠	弟子	王					
Ba. i. 5, 11, 11-14.	サビソダ	サクルヤ	弟子	rtvig	王				
M. ix. 187, 189.	サビソダ	サクルヤ	師匠	弟子	王				
Y. ii. 135-136.	妻	女子	父母	兄弟	兄弟の男 子	gotraja	bandhu	兄弟 子	sabrah- macarin
Vi. xvii. 4-13.	妻	女子	父母	兄弟	兄弟の男 子	bandhu	サクルヤ	sahād- yayin	王
ŚL. 293 = Paithūnai <sup>(48)</sup>	兄弟	父母	第一の妻 ラ	サゴート 弟	弟子	sabrah- macarin			
N. xiii. 50-52.	女子	父	サクルヤ	bandhu	sajāti	王			
B. xxvi. 111, 134, 108. <sup>(49)</sup>	妻	女子	兄弟	父母	サビソダ	サクルヤ	bandhu	弟子	ジエロー イリヤ
K. 927. <sup>(50)</sup>	妻	女子	父母	兄弟	兄弟の男 子				
Devata <sup>(51)</sup>	同胎の兄 弟	女子	父	兄弟の兄 弟	母	妻	同居の親 族		
Kaṇṭṭ. iii 5, p. 160.	女子	父	兄弟	兄弟の男 子	同居者	王			

である」<sup>(52)</sup>とあり、また M. ix. 217 に母の相續が規定され、そして次に述べるサビンダに父・兄弟および兄弟の男子が含まれるので、V, VI 以前にて彼らが相續人として認められなかつたのではない。<sup>(53)</sup> (三) 次に相續人の範圍がサビンダ (sapinda)・サクルヤ (sakulya)・バンダウ (bandhu) に及んでいる。(四) さらに師匠・弟子あるいは *sabrahmacarin, sahadyayin* というヴェーダの教授者・受學者・同學者にまで及んでいる。(五) 以上の相續人がないときには王に歸する。(六) ただしバラモンの場合を除く。

ここにて問題になるのは、王の沒收とサビンダ以下の相續人との關係である。サビンダなどについては後日考察するつもりであるが、いずれもその範圍は曖昧である。前記の (三) と (四) にいうところを、これらのすべての者が順次に相續人になることができると解釋すれば、王が相續人なき財産を沒收することは無意味に近いであろう。しかし前節述べたように、V. ii. 139 は *samsritin* でない異胎の兄弟を相續人から除外しており、また VI. xvii. 15-16 には師匠・弟子の相續を林住者の場合に限定している。さらに IV は相續人の範圍を兄弟・兄弟の男子までとし、Devata はこれに同居親族を加えている。また IV はサビンダ・サクルヤなどを相續人と認めているが、B. xxvi. 119 には「男子がなきクシャトリア・ヴァイシヤ・シュードラにして妻・兄弟がなければ、王は彼らの財産を取る。王はすべての支配者 (adhipati) であるから」<sup>(55)</sup>とあつて、妻・兄弟のみに限定している。このように男子なき場合の相續人の範圍を限定する規定が見られることは注目される。

また古典ヒンドゥー法を通じて相續人なきバラモンの財産を王が沒收することを禁じており、その財産がシュローティリヤ (Śroutiya) あるいに三ヴェーダを知る者 (trairiḍya) というヴェーダの學識をもつ者に歸すことを規定している。<sup>(57)</sup> しかも Ba と Va には「バラモンの財産は男子と男孫を殺す。毒は一人を殺すだけである。毒は毒とはいえ

ず、バラモン<sup>(58)</sup>の財産が毒であるといわれる」とあり、バラモン<sup>(59)</sup>の財産について威嚇的文句が記されており、Ba, M には相續人なき財産がバラモンに歸すべきことを規定している。このようなバラモンの特權の規定が古典ヒンドゥー法の一性格であることは改めて言うまでもない。

(1) 例えば、バラモンが四種姓出自の妻から生れた男子をもつときには、それぞれの男子の相續分は生母の種姓に應じて4:3:2:1:で表わす(=4:3:2:1) (M. ix. 152-3, Y. ii. 125, B. xxvii. 42, cf. Kaat. iii. 6, p. 163) 相續分は種姓順位により算術級数で表わす(=4:3:2:1) (Va. xvii. 48-50, Ba. ii. 2. 3. 10, M. ix. 151, Vi. xviii. 1-40, B. xxvi. 41) cf. Ga. xxviii. 35-39, Ba. ii. 2. 3. 9, 11-12, M. ix. 150, N. xiii. 14. 下級の種姓の男が上級の種姓の女と婚姻するに、つまり種姓の逆順序 (pratiṇya) 婚姻は禁じられる。この婚姻で生れた男子の相續に關するは、Kane: HDh. iii. pp. 618f 參照。なお Vṛddha Manu (Krt. Vy. p. 702, DB. ix. 17 = B. xxvi. 53) には、「バラモン出自の妻の男子がブラフマダーヤとして傳えられた土地を取るべきである。再生族出自の妻の男子が傳來の土地および家屋をすべて取るべきである」(brahmadāyagatān bhūmīn hareyuh. brāhmaṇīstāh | kṛhaṇ dvijāyay sarve yathā kṣetrah kramāgātam ||) ㊦㊧㊨ B. xxvi. 121 ㊦㊧㊨ も「クシャトリヤ以下の出自の妻の男子に受贈した土地を與えてはならない。もし父がそれらを與えるならば、死後にバラモン出自の妻の男子が取るべきである」(na pratigrahahū deya kṣatriyādīstāya vai | yady apy eṣān pītā dadyān mite viprāsto hareṭ ||) ㊦㊧㊨ B. xxvi. 122 (=43) には「シャードラ出自の妻に生れた再生族の男子は土地の分をもつことができなす。同じシャータヤ (あるらは再生族) ㊦㊧㊨の出自の男子㊦㊧㊨がすべてを得べきであると法が定められる」(śūdrāṇ dvijābhīr jāto na bhūmerbhāgān arhati | sājātāv (or dvijātīr) āpnuyāt sarvaṁ iti dharmo vyavasthītaḥ ||) ㊦㊧㊨ この㊦㊧㊨は、ブラフマダーヤ brahmadāya or brahmadeya (バラモンに施與された土地) はバラモン出自の妻の男子に限って相續され、土地と家屋は再生族出自の妻の男子によつて相續されて、シャードラ出自の妻の男子によつて相續されることを

許さなう。

(2) これらの子にいつは Jolly: RS. ss. 71-76, Kane: HDh. iii. pp. 643-561 を参照。なを表は Kane: HDh. iii. p. 645 に基いて作成し、子の邦譯は田邊繁子女史に従つた。女史は「マニ法典にあらわれたる相續」について最も詳細な M の規定を説明されてゐる。

(3) Ba. ii. 2. 42 に「彼らのうち未成年者の分を利息とともに成年に達するまでよく保護し保管すべきである」(teṣāṃ apra-  
ptavyavahārāṇāṃ enīśaṃ sopaceyāṇaṃ sunigṛhṇān nīdhyur āvayavahārāpāpāt.) とある Ga. x. 48 に「[H] 子  
の財産を成年に達するまであるは「師匠の家から」歸るまで保護すべきである」(rakṣyaṇaṃ bālādhanam ā vyavahārāpāpā-  
nāt samāvṛtter vā.) とある。しかし第二期諸法典には記されてゐない。

(4) N. i. 36-37ab には「胎兒から八歳に至るまでを śiśu と知るべし、十六歳に達しない少年を pogaṇḍa とする。その後は成年と知るべし、両親がいなければ獨立者である」とあり K. 844cd に「男は十六歳にて成年に達する」(purnasāṇ ca  
śoḍaśe varṣe jāyate vyavahārīaḥ) とある。なを Kent. iii. 3. p. 154 に「女は十二歳にて成年となる」(prāptavyavahārā  
bhavati) 男は十六歳とし」とある。cf. Jolly: Outline of an History of Hindu Law, p. 83. n. 5.

(5) せいとも N は両親の生存中には男子を非獨立者とし、非獨立者の行爲を無効としける(前節註を参照)。cf. N. i. 31 (= K. 552) なを Kent. iii. 1. p. 148 に「他に從屬する者」(apāsārayave) の法律行爲は無効である」と、そこでは父に從屬する男子・男子に從屬する父、相續財産をいまだ得ていない兄弟・夫または男子に從屬する婦女・未成年者・老年者・奴隸などをあげてなり、「ただし委任された法律行爲はこの限りとなら」(anyatra nīrṣṭa vyavahārebhyaḥ) とする。

(6) K. 844ab. saruprāptavyavahārāṇāṃ vibhāgāś ca vidhīyate || Kent. iii. 5. p. 161 に「同く ~ prāptavyavahārāṇāṃ  
vibhāgāḥ する」。

(7) K. 845. aprāptavyavahārāṇāṃ ca dhanam vyavaharīṇāṃ | nyaseyur bādhumitṛeṣu proṣṭhānāṃ tattatva ca ||

Kaut. にも前註に續して「未成年者の財産を清算して母方の親戚 (bandhu) あるは村老 (grāmayiddha) に成年に達するまで保管すべきである。また旅行者の〔財産も同じ〕」(apṛāptavyavahāṇān devavīśuddhān mātṛbandhusu grāmaviddhāsu va śhāpāyeyur vyavahāṇāpāṇāt prośitasya vā) とある。これに對應して K. 552. には「父が死んだときに成年に達してゐない者はなんら〔父の債務を支拂わ〕ない。時が來たらば定めに從つて支拂うべきである。さもなければ地獄に住する」(nāpṛāptavyavahāreṇa pitray uparate kvacit || kāle tu vīdhiṇā deyaṇi vaseyur naraḥ nyahā ||) とあり、未成年者の債務辨済に猶豫が與えられてゐる。

(8) 前註 3 に掲げた規定。SL. 301ab (cf. 300) も同様。また M. viii. 27 には「王は少年の〔相続〕財産などの財産を〔師匠の家から〕歸るまでまたは少年期を過ぎるまで保護すべきである」(baladāvādiken rikthan tavad rājānpālayet | yāvat sa syāt samāvṛtto yāvat vātisaśaṣayeh ||) とある。Va. xvi. 8-9, Vi. iii. 65, N. xvi. 8-9 などとも同趣旨である。

(9) なお B. xxvi. 63-67 には、不在者および彼の直系卑屬が現われるとき、彼は不在者が相続するところの財産を得ることが規定されている。すなわち、「分割が行われていてもいなくとも、相続人 (rikthn) が現われるときには、共同財産 (sāmānya) に屬するものがあれば、彼はその分を取る。長い間旅行していても、債務・文書・家屋・土地にして祖父のものがあるときには、彼は分をもつ。ゴートラの共同財産 (sādharaṇa) を捨てて他の地方に居住し、歸つてきたときには、彼に分を與えることは疑いない。三・五あるいは七〔代目〕の者であつても、生れと名が確められれば、傳來したものの分を得べきである。土着の者 (māta)・隣人 (sāmantā) のすべてが互に所有者 (svāmin) を知り、彼の子孫が歸つてきたときには、gotraja が土地を與うべきである」と。[B. xxvi. 65-67 (= K. 889-891)]

(10) N. xiii. 33-34 に「彼ら(男子)のうちで父が順當にサンスカールを行なかつた者には、兄が父の財産をもつて行くべきである。父の財産がないときには、前にサンスカールを行つた者が自分の分から出して兄弟のサンスカールを行うべきである」(Yogān tu na kṛtāḥ pitṛa saṁskāravādhayaḥ kramāt | kartavyā bhṛāḥbhis teṣāṁ paitṛikāḥ eva te dhanāt | avidyamanāne

124ab.

(kammedhyagaddhanad)をもつて行くべきことを規定している。

masya bhāgaṁ daduḥ.) ८५०

とある。

$m=)$ とある。

(15) Y. ii. 120 cd. anekapitṛkāṇāṃ tu pitṛto bhāgakaḥ panā ||

(16) Vi. xvii. 23 に「多くの父のいる男子の間では父に従つて分が定められる。彼は彼の父の財産を取るべく、他の者は〔取れ〕なす」(anekapitṛkāṇān tu pitṛo 'nisapṛakalpanā | yasya yat pitṛkaṁ rikṭhaṁ sa tad gṛhṇīta netarāḥ ||) である。また Kant. iii. 5. p. 160 に「多人數では、父のなる兄弟および兄弟の男子は父の1つの分を取るべきである。同胎の多くの父の間では父に従つて財産が分割される」(apitṛkā bahavo'pi ca bhṛātaro bhṛāṭputrāś ca pitur ekamañśaṁ hareyuh. sodaryānām anekapitṛkāṇān pitṛo dāyavibhāgaḥ) である。

(17) K. 855-6. avibhakte' nujē prete tatsutaṁ rikṭhabhāgīnam | kurvīta jīvanam yena labdham naiva pītumahāt || labhetamañśaṁ sa pitṛyaṁ tu pitṛiyāt tasya vā sūtāt | sa evāñśas tu sarveśān bhṛāṭṛiṇān nyāyato bhavet || labheta tatsuto vāpi nivṛttiḥ parato bhavet || また K. 850 には「債務・愛情とつとめられたものを支拂つて残りを分けるべきである。彼の男子は順次に四代目までそれを取るべきである」(ṛṇān prāṭipradānam ca dattvā śeṣaṁ vibhājyet | ā caturthāt tu tadgrāhyaṁ kramaṇaiva tatsutaḥ ||) である。 (od 15 Kane のテキストには註に記されているが Krt. Vy. p. 672 では「つづ本文とつづ探した」) Devaia (Krt. Vy. p. 663, Apa. p. 727) には「とめて住する不分割・分割の kṛtya の間では、四代目まで土地の財産分割が行われるとは定めである」(avibhaktavibhaktānān kṛtyānān vasatān saha | dhūyo dāyavibhāgaḥ syād ā caturthād itī sūtitḥ ||) とあり、前の規定と同じく男曾孫まで順次に代位相續することを認めるならば、四代目は父から数えたものである。

(18) なお K. 559 には「父の債務があるときには、男子は財産をとつてはならない。その債權者に財産を支拂うべきである。〔父が〕死つて〔男子が〕取るときは、支拂わなければならない」(pitṛarṇe vidyamāne tu na ca putro dhanam haret | deyaṁ tad dhanike dravyaṁ nite gṛhṇāns tu dāpyate ||) である。家産分割の際に債務を清算するところが規定されている。産は均しく分たれる」(ṛṇarṭhiyo samo vibhāgaḥ) である。

(20) Ga. xii. 41, Va. xvi. 31=M. viii. 159, Y. ii. 47, N. i. 10, B. x. 118, Uśāna (Mit. on Y. ii. 47, Ap. p. 648)=Vy.

ii. 40. cf. Kant. iii. 16. p. 189. K. 572 には男子が父の不適な (avyakta) 債務に辨濟責任を負担しなうことを規定し、56-5 には愛欲および怒りによつて生ずる債務について説明している。なお保證によつて生ずる債務については、規定が一致してゐない。すなわち、M. viii. 160 には「上述の規定は出廷した保證人に適用する。支拂の保證人が死するときには相續人に支拂わしむべきである」(dāśanapratibhāvyē tu vidhīḥ syāt pūrvacoditāḥ | dānapratibhūvi prete dāyādānān api dāpayet ||) とあり、Y. ii. 53-54, Vi. vi. 41 にも同じく支拂の保證の場合にのみ相續人たる男子が辨濟責任を負担することを規定してゐる。また K. 561 には「男孫は保證によつて生じたものをなんら支拂うべきでない。男子はすべて父の「保證の」債務の元金を支拂うべきである」(prātibhāvyāgataṇ peutrai dāpayan na tu tat kvacit | putreṇāpi samam deyam ṛṇam saravatra patṛkam ||) とあり、Vy. ii. 39 も同趣旨であり、男子が辨濟責任を負うが、男孫に及ばないことを規定してゐる。

(21) Vi. vi. 35-36. patṛkam ṛṇam avibhaktānān bhrātṛṇān ca. vibhaktāś ca dāyānurūpāṇsem. N. i. 2 (=B. x. 117) にも「父の死後には分割した男子は分に應じて〔父の〕債務を支拂うべきであり、ある人は分割してゐない〔男子〕はその束縛を除くべきである」(pitary uparate putrā ṛṇam dadyur yathāśataḥ | vibhaktā avibhātā vā yo vā tām uddhared dhuram ||) とあり。

(22) Y. ii. 50 に「父が旅行し、死し、あるいは困難な状態に置かれたときには、男子と男孫とが債務を支拂うべきであり、拒否するときは證人が確める」(pitari proṣte prete vyaśabhiprītē pi vā | putrapautrai ṛṇam deyam mīmave saksī-bhāvitam ||) とあり、K. 549 (=B. x. 109) に「〔父が〕病氣にかかり、狂亂し、老衰し、または遠くに住するときは、生きつゝ男子に債務を支拂わしむべきである」(vyādhiomāta-vyādhiānān tathā dīrghaprayasīnām | ṛṇam evam vi-dham putrān jīvatām api dāpayet ||) とあり、cf. K. 550 (=B. x. 110).

(23) Vi. vi. 27 に「債務者が死し、遍歴者となり、あるいは二十年間旅するときには、その男子と男孫は財産を支拂うべき



ㄱㄴㄹ (dhanagrāhīṇi prete pravrajite diviśāsa samāḥ pravastite vā tatputrapautrain dhanam deyam) とある、  
N. i. 14 に「父が旅行している場合には、男子は二十年以内には債務を支拂わなくてもよい。また叔父・長兄の場合でも同じ」  
(nārvāk-saṁvatsarādvinśat pitari proṣṭhe sutah | ṛṇaṁ dadyāt pitṛvye vā jyeṣṭhe bhṛātavya athāpi vā ||) とあり、K.  
549 に「〔父が〕生きていづれ、病氣にかかり、あるはその地方から旅行しているときは、二十年後に父が作つた債務を男  
子を支拂ふべきなり」(vidyamāne 'pi rogānte svadeśāt proṣṭhe 'pi vā | vinśātsamvatsarād deyaṁ ṛṇaṁ pitṛkṛm sutai-  
ḥ ||) とある。

(24) B. x. 113 に「始めて父の〔債務〕を、次に自己の〔債務〕を支拂ふべきである。兩者の前に常に祖父の債務を支拂ふべ  
きなり」(pitṛyam evāgrato deyaṁ paścād ātmīyam eva ca | tayoḥ paitāmahaṁ pūrvam deyam evam ṛṇaṁ sadā ||)  
とあり、K. 555-6 に「祖父から傳つた債務を、父が缺陷なきを確めて、男子が返却しないときは、男孫が支拂ふべきである  
ブリグはさう。祖父〔の債務〕を男子が病氣にかかつて支拂わなうときは、男孫が祖父の〔債務の〕元金を支拂ふべきであ  
る」(pitṛ dṛṣṭam ṛṇaṁ yat tu kramāyātāṁ pītāmahāt | ndoṣaṁ noddhṛtaṁ putrain deyaṁ pautrais tu tad bhṛguḥ ||  
paitāmahaṁ tu yat putrain na dātām rogibhiḥ sthitaḥ | tasmād evaṁ vidhīṁ pautrain deyaṁ paitāmahaṁ samam ||)  
とある。cf. K. 554, 558.

(25) N. i. 4. kramādayātātāṁ prāptāṁ putrain yaṁ nairṇam uddhṛtam | dadyuh paitāmahaṁ pautṛs taccautṛhāṁ  
nivatate ||

(26) K. 560 に「男子がいなければ、男孫が留意して債務を支拂ふべきである。四代目は支拂わなうともよい。そこからそれ  
(債務) は終る」(putrābhāve tu dātavyam ṛṇaṁ pautreṇa yatnataḥ | caturthena na dātavyaṁ tasmāt tad vinir-  
vartate ||) とある。

(27) B. x. 114. ṛṇam ātmīyavat pitṛyaṁ putrain deyaṁ vibhāvītam | paitāmahaṁ samam deyam adeyam tatsatasya tu ||

(83) cf. J. Jolly: SBE. xxxiii. pp. 42-4. n, Kane: Kāvāyansmṛtisāroddhāra, pp. 229-32. n, HDh. iii. pp. 443-4.

(86) ここに掲げたのは前記の規定に二度以上記されているものであるが、その他に、*śānta* にもとつて財産を贈與した者 (*Āp*)、異つたアーシユラヤに入つた者 (*V*)、尊者・聖者 (*M*)、父に敵した者 (*pitriv*)、跛者 (*N*)、癡病者・*lingin* (*Devala*) が記されている。

(83) M. ix. 202 には「賢者は能力に應じ彼らすべてに適當に食物と衣服を與ふべきである。與えないときには *patita* となる」(*śarveṣām api tu nyāyair dātum śaktyā manīṣiṇā | grāsācchādānamatyantair patito hy adadad bhavet* Ⅱ) である。N. xiii. 22 には「長期あるうは激しい病氣になつた者・愚人・狂人・盲人・跛者は家族にて扶養されるべきである。それの男子は分を<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>」(*dirghatīvrāmaya-grastā jaḍ-ommat-āndha-kuṣṭhinaś ca. sati bhāryāthe teṣām apatyamatadvidhaṁ tv aśābhāgiṇaḥ* Ⅱ) である。Devala (Kṛt. Vy. p. 668) には「父の死後、性無能力者・癡病者・狂人・愚人・盲人・*patita*・*patita* の子・*lingin* は財産の分を<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>。彼らの<sup>レ</sup>子や *patita* を除く<sup>レ</sup>食物と衣服とを與ふべきである。その男子は缺陷あるを<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup><sup>レ</sup>父の財産の分を<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>べきである」(*mṛte na pitari kṛtba-kuṣṭhy-ummatā-jaḍ-āndhakāḥ | patitāḥ patitāpatyair liṅgi dāyāśābhāgiṇaḥ* Ⅱ) である。teṣāṁ *patitavarjebhyo bhaktavastarair pradīyate | tatputrāḥ pitṛdāyāśair labheran doṣa-varjīṭāḥ* Ⅱ) である。Kant. iii. 5. p. 161 には「*patita*・*pitita* の子・性無能力者は分をもつた。愚人・狂人・盲人・癡病者と同じ。彼らの<sup>レ</sup>子や妻を娶<sup>リ</sup>、その子と同じに<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>べきである。patita を除いて衣服と食物が與えられ<sup>レ</sup>」(*patitāḥ patitājātāḥ kṛtbaś cāmanīṣāḥ. jaḍ-ommat-āndha-kuṣṭhinaś ca. sati bhāryāthe teṣām apatyamatadvidhaṁ bhāgaṁ hareḥ. grāsācchādānam itare patitavarjāḥ*.) である。

(84) Āp. ii. 6. 14. 6. *jyeṣṭho dāyāda ity eke. 10. tae chāstrair vipratīṣidham. 11. manuḥ putrebho dāyaṁ vyabhaḥjad ity aviśeṣeṇa śrūyate.*

(85) Ba. ii. 2. 3. 2-3. *manuḥ putrebho dāyaṁ vyabhaḥjad itī śrūtiḥ. samaśaḥ sarveṣām aviśeṣāt.*

(33) Vi. xviii. 36, B. xxvi. 19ab, Uśāna (Krt. Vy. p. 662) Pañhinasi (DB. iii. 25). 死後分割と云うは Ga. xxviii. 1, M. ix. 104, Y. ii. 117ab, Hā. iv. 4. 生前分割と云うは 前記 Āp, Ba の規定のほかに K. 843 と「生前の分割と云うは 父の男子とを區別しつたならぬ」。なる理由もなしに突然一人の男子にわけなことは許されなく」(jivadvibhage tu pitā naikairi putairi viśeṣayet | nibhāṣayen na caivaikam akasmāt kāraṇaṁ vinā ||) と云ふ。この規定は Kant. iii. 5. p. 161 の २२ (jivadvibhage pitā naikairi viśeṣayet. na caikam akāraṇaṁ nirvibhajet) と其へる २२ である。

(34) Ga. xxviii. 3. sarvaṁ vā pūrvajasy-ctarāṁ bibhīyāt pitṛvat.

(35) M. ix. 105-108. jyeṣṭha eva tu gṛhṇīyat pitṛyaṁ dhanam aśeṣataḥ | śeṣas tam upajīveyur yathauva pitarāṁ tatthā || jyeṣṭhena jātānātreṇa putrī bhavati mānavāḥ | pitṛṇām aṁṇas caiva sa tasmāt sarvaṁ arhati || yasminn ṛṇaṁ sanīhayaṁ yena cānanīyaṁ aśunte | sa eva dharmajāḥ putraḥ kāmajāṁ itarāṁ viduḥ || piteva pālayet putrāṁ jyeṣṭho bhrāṭṛṇ yavīyasaḥ | putravac cāpi varteraṁ jyeṣṭhe bhrāṭari dharmataḥ || 44 107 の類似の規定と云うは Va. xvii. 1, M. vi. 35, ix. 137, Y. i. 78 24 である。すなわち父の負ふ目を除く男子の重要性を述べた規定があるが、長男子を特記しそのはりの規定と云うのである。

(36) B. xxvi 17. diviprākāro vibhāgas tu dāyādānāṁ prakṛitāḥ | vayo jyeṣṭhakraṁajaiḥ samā parāṁśakalpanā ||

(37) 前節註に参照。

(38) Ba. ii. 2. 3. 13. gṛṇavān hi śeṣāṇāṁ bhartā bhavati.

(39) N. xiii. 5. bibhīyād vecchataḥ sarvāṁ jyeṣṭho bhrāṭā yathā pitā | bhrāṭā śaktāḥ kaniṣṭho vā śaktyapekṣaḥ kule śrīyaḥ ||

(40) M. ix. 116-7 とは「この中に特別分 (uddhāra) を取つて均しい分を定むべきである。特別分を取つてないときには次の中に分 (arīṣa) を定むべきである。長男子は一つ多い分を、その次の男子はその半分を、年少〔の男子〕はそれぞれ一つ古典ビエンガウー法の家産分割規定

を取るべきと定められる」とある。この前文 (112) の特別分の規定は、「長男子の特別分 (uddhāra) は二十分の一と全財産の最もよきもの、中男子はその二分の一、末男子は四分の一である」とあり、ここでは *an̄sa* にて表わされる不均等分割と特別分 (uddhāra) とが區別をわける。

- (41) Ga. xxviii. 9-10, *dyaññī vā pūvajaṣya. ekaṅkam itareṣāṃ. N. xiii. 13. jyeṣṭhāy-an̄so 'dhiko jñeyaṇ kaniṣṭhāy-āvaraṇ smitaḥ | samāśabhaṇaḥ ṣeṣāṇ syur apratā bhāgiṇī tathā ||* の他の不均等分割規定は Va. xvii. 42, M. ix. 117, 156 (= B. xxvi. 11), B. xxvi. 12, 21 など。

- (42) したがって B. xxvi. 21 とは「生れ・學識・品行にて最も優れた者は、『父の』財産から二つの分を得べきである。他の者は均しづ分が分與される。彼は他の者にあつて父と同じであるから」(janmavidyāgūṇair jyeṣṭho dyaññeṣaṇ dāyād avāpnuyāt | samāśabhaṇas tu anye teṣāṇ pūrsamas tu sah ||) とあり、出生順の優位と並んで才能が重視されつたり、また B. xxvi. 12 の「彼ら〔男子〕のうち學識あり仕事を好む者はより多く得るに價する」(vidyā-karmaratas teṣāṃ adhikarī labdhum arhati ||) など。

- (43) Ba. ii 2. 3. 6-7, *dāśanāṇ vaṅkam uddharej jyeṣṭhaṇ. samam itare vibhajeran. ||* の種の規定は Ga. xxviii. 5, Va. xvii. 43, M. ix. 112 など。

- (44) Ga. xxviii. 11 とは「あるは年長の者から順次に物品 (dhanarūpa) を一つずつ欲する」とあり、同じく 5-8 には詳しい規定があり、家畜が主要なもので、長男子には牛が定められており、その他に長男子に乗物、末男子には穀物・家屋・乗物が記され、Va. xvii. 42-45 には「長男子に牛と馬、末男子に山羊と家屋、中男子には黒き鐵と家具を規定し」、Sl. は長男子に牛、末男子に家屋を定め、「父の事情による場合を除く」(anyatra piturvasṭhanā) とあつて、父が任意に定めることを記している。Ha. iv. 15 とは長男子に牛・神像・家屋を定めており、そして「他の男子は〔家から〕出て行くべきである。あるは一つ〔の家屋〕のときには、長男子は南を、他のものは順序に従つて」とある。cf. Kauf. iii. 6, p. 152.

(43) cf. Jolly: RS. ss. 84-87, Kane: HDh. iii. pp. 700-769.

(46) Āp. ii. 6.14. 2-3. putrabhāve yath pratyasannaḥ. tadabhāve ācārya ācāryābhāve 'ntevāsi hṛtvā. なぞ pratyasanna といふは SBE. xxv. pp. 366-8. n, Kane: HDh. iii. pp. 733-6 を参照せよ。M. ix. 187ab によつて「彼のちやんちの最も近き者によつて彼の財産が屬すべきひとる」(anantarah sapindād yas tasya tasya dhanam bhavet Ⅱ) となる。

(47) Y. ii. 136. eṣām abhāve pūrvasya dhanabhāg uttarottarah | svaryātasya hy apuṭrasya sarvavarṇeṣv ayaṁ vidmḥ Ⅱ

(48) Viś p. 252, Mit. ii. 1. 35, Āp. p. 741 によつて ŚL によつて Kṛt. Vy. p. 748 によつて Pañhinasi によつて DB. xi. 1. 15 によつて ŚL, Yama, Pañhinasi と歸せられる。

(49) B には相續順位に關する規定が多く、他の法典に比べて明確である。Kṛt. Vy. pp. 750f. に相續順位の規定として xxvi. 134, 111, 137, 138 が記されている。134 は同胎の兄弟・兄弟の男子・サクルヤ・bandhu・弟子・シローテイリヤといふ相續順位を記し、111 は妻・兄弟・父母・サビンダといふ順位を記し、138 は「多くの jñātī・サクルヤ・bandhu があれば、彼らのうち最も近き者が男子なき者の財産を取るべきである」とある。以上の規定によつて表に書き入れた。ただ 126 によつて妻の次に女子を補つた。なお 93 (Ⅱ 136) には妻・同胎の兄弟・dāyāda・女子の子の相續順位が記され、また 108 には「彼の姉妹があるときは、彼女は分を得るに價する。これは男子・妻・父なき者の法である」とあり、女子の子や姉妹も相續人として記されている。

(50) K. 928 には父・兄弟・生母・父方の祖母といふ相續順位が記されている。

(51) Kṛt. Vy. p. 749, Āp. p. 741 に引用されている。

(52) M. ix. 185cd. pitā hared apuṭrasya nikhṇaṁ bhrātara eva ca Ⅱ

(53) M. ix. 217 によつて「母は子なき男子の財産を取得すべきである。母が死するときは父の母が財産を取るべきである」(anapa-yasya puṭrasya mātā dāyam avāpuṇyāt | mātary aṇi vṛttāyān pūtmātā hared dhanam Ⅱ) となる。

- (54) 父が相続するのは彼の男子の特有財産か生前分割後の財産である道理である。
- (55) B. xxvi. 119, ye' putrah kṣatравісodhtrāḥ patnibhātṛivivarjitāḥ | te'sān dhanaharo rājā sarvasyādhipatiḥ hi saḥ ||  
 なな K. 931ab とは「相続人なき者 (adāyika) の財産は婦女の扶養費・死者の葬儀費を除く王で歸す」(adāyikan  
 rājagāmi yośodbhṛtyaundhradehikam ||) とある。
- (56) Āp. ii. 6. 14. 5, Ga. xxviii. 42, Va. xvii. 84, Ba. i. 5. 11. 15, M. ix. 189, Vi xvii. 13, N. xiii. 51, B. xxvi. 119,  
 Devaia (Krt. Vy. p. 751).
- (57) Ga. xxviii. 41, Va. xvii. 87, Ba. i. 15. 11. 14, Vi. xvii. 14, ŚL. 300 = Paṭhnasi, K. 931cd, Devaia (Krt. Vy. p. 751).
- (85) Ba. i. 5. 11. 16. brahmanasvān putrapautratraghnam viṣam ekākinam haret | na viṣam viṣam ity āhur  
 brahmasvān viṣam ucyate || Va. xvii. 86 とは ab, cd の順序が逆に記されている。
- (65) Ba. 1. 5. 11. 14. と「(相続人)がいないときは、王はその財産を三ウエーダに通曉する者に與うべきである」  
 (tadabhiāve rājā tatsvān traividyaṛddhebhyaḥ samprayaçet.) とあり、M. ix. 188 と「すべし (相続人が) いな  
 うときは、三ウエーダに通じ誠實にして自制心あるペラムンが財産の分をもつ。かくつダムハは侵されなう」(sarveṣān  
 apy abhāve tu brāhmaṇā rikṭabhiāgmaḥ | traividyaḥ śucayo dānās tatā dharma na hīyate ||) とある。

附記 本稿を作成するにあたって、辻直四郎先生から貴重な文献をお借りし、また京大文学部図書室・比較法制史學會の蔵書を閲覧させて頂いた。ここにあつく感謝の意を表する。